家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

②

48.1.23

第七十二巻　第二号　日本幼稚園協会

幼児教育界をリードする新書判シリーズ!!

フレーベル新書

フレーベル新書7

自然物のおもちゃ

新刊発売!!

滝田要一著　360円

葉っぱや野菜、卵などを使って、子どもたちが創る動物やおもちゃ、昔から伝わる麦わら細工や草花細工など、おとなには郷愁を、子どもには自然を発見させる楽しい自然工作集です。

■好評既刊■

リナはどうやって文字を覚えたか……330円	4 楽しい遊び〈室内・園庭編〉……300円
2 保育者への一つの指針 ……360円	5 楽しい遊び〈伝承遊戯編〉……300円
3 対談・しごとと生きがい……360円	6 楽しい遊び〈園外編〉……300円

豊かな保育の世界がここから始まる……

保育カリキュラム資料

〈全6巻〉（5，6のみ近刊）

1…春　2…夏　3…秋
4…冬　5…遊び　6…小事典

B5判　136頁　各巻600円
（送料 110円）

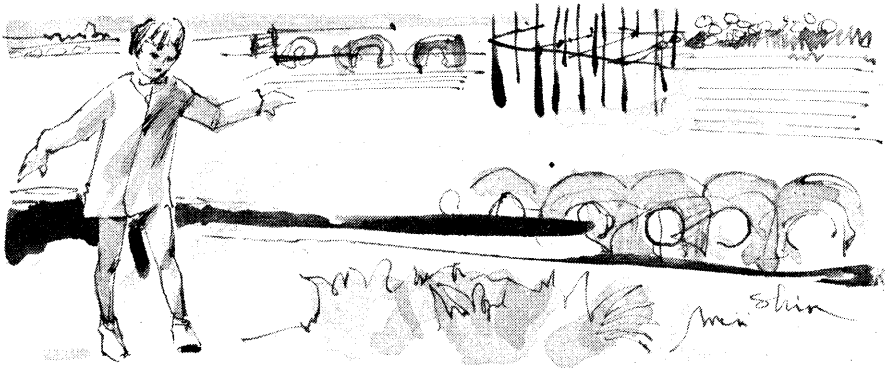
《冬》

子どもは一時としてじっとしてはおりません。その一瞬一瞬を力いっぱい活動し生活しているのです。せっかく苦心して作り上げたカリキュラム表も、あっというまにくずされることもしばしばです。
そんなとき、いつ、どこででもすぐに役立つのがこの資料集です。あしたのカリキュラムのためのヒントを集めた、あなたのための保育ハンドブックです。

株式会社 フレーベル館

幼児の教育

第七十二巻　　第二号



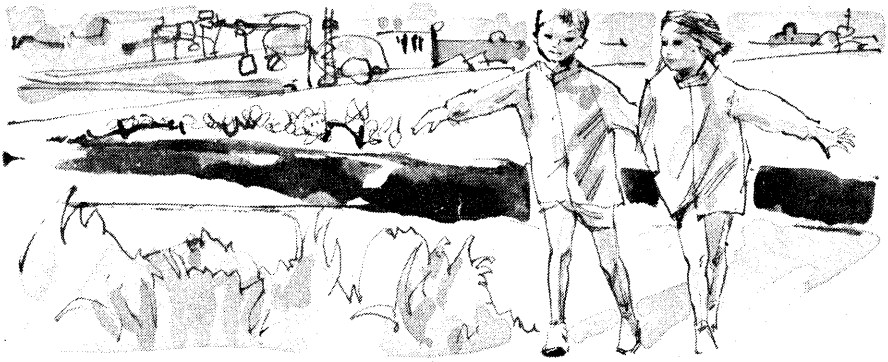
幼児の教育　目次

——第七十二巻　二月号——

表紙　赤坂三好
カット　斎藤信也

©日本幼稚園協会
1973

倉橋惣三選集より……（4）
養護と教育……牛島義友…（5）
★講演
昔話のユング的解釈・その四
—いばら姫—……河合隼雄…（11）



子どもの生きがい……西本美節…(37)
肢体不自由児教育にたずさわって……鍋島美春…(44)
幼児教育の源流（Ⅲ）
—ペスタロッチ—……二文字理明…(50)
私の保育……山崎美知子…(60)
幼児の観察研究—反省と出発……津守　真…(62)

二月

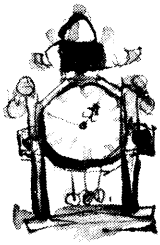
寒い空が雪となった。埋めて白く、どこを道ともわかち難い。その雪の上を、難儀がるのはおとなたちである。嬉々としてよろこび走ってゆくのは子どもたちである。

子どもには何でも楽しくないものはない。何ものにも、新しい興味と勇ましい気力とを喚び起こさずにいない。何ごとに対しても、苦にしたり、しりごみしたりしない。

おとなが、寒さにふるえて冬籠る此の二月こそ、子どもとおとなの違いを、しみじみと思わせる月である。それにしても、子どものお陰でこそ、二月の雪も、さえざえとよろこんでいることであろう。若し世の中がおとなばかりだったら、二月の雪も、これはたまらぬといじけふるえてしまうことであろう。

（倉橋惣三選集　第三巻　育ての心より）

養護と教育



牛島義友

一、幼稚園は教育する所であり、保育所は養護を主とする所である。したがって、保育所に通う子どもは教育を受ける権利を失うから、幼稚園と保育所は一元化しなくてはならないといわれたり、あるいは保育所は保育の中でも十分教育的機能が含まれていて、しかも養護と教育が一体となって行なわれるので、幼稚園とは別個の存在であり、一元化必ずしも望ましくないと反対している。したがって今日の幼児保育の中心問題は養護と教育の関係をめぐって展開しているといってもよい。しかし元来教育とか養護とかの概念もあいまいであるので、この論争は水かけ論にもなりがちである。

元来教育とは何ぞやと開き直り、ここで一つの定義を行なってみても、それはここだけの話で一般の論争には役立たない。それでむしろ教育などという言葉は幼児の世界からは捨てて、昔ながらの保育というあいまいな言葉で子どもの問題を考える方が実際的である。しかし一応教育的機能と養護的機能で問題を取り上げると、ある程度考え直す必要もおこる。

教育を非常に狭い意味にとり、学校教育の中の知識教育である授業や学習に限定すれば話は簡単であり、幼児の世界にはこのようなものはないといえばよい。あるいは幼稚園教育の中で授業らしいものが行なわれているとしたら、それは行き過ぎであると批難してもよい。しかし学校教育の中でも生活指導という大きな分野があり、また教科学習の場合でも態度の育成が要求される。社会科の学習は民主的態度を身につけさせるのが、一つの目標でもある。態度とか生活指導が人間形成のためには重要なものとされてきたので、たとえば身辺生活の自立とか社会性の育成というものも立派な教育内容であり、幼稚園の保育もまた教育であると考えるようになった。子どものそれぞれの能力や特質に応じて十分に伸ばすことが教育であるともいわれ

る。そうすると、幼児を対象とした計画指導は当然教育であり、また精神的幼児である精神薄弱児の指導も教育となり、重症児の場合には食事の時間すら教育ということになってくる。少なくも自分で食べるように育てることが教育である。同じ意味で家庭で授乳の時間をきめてよい習慣をつけようとしているのも教育といわざるを得なくなる。

しかも教育なるがゆえに文部省の所管であり、学校教師の権限であると考えると問題が複雑となる。保育所でやっていることも教育であり、厚生省の精薄施設の教育もまた教育であり、母親の育児もまた教育であり、それぞれの持ち場においてできるだけ子どもの幸せのために努力してほしいというなら話はわかる。しかし、教育だから一元化せよとか、他のやっていることに対し不信の言辞をするのは間違っている。

ただ困る事には経済的な理由で学校教育におもねるような傾向がある。たとえば、保育所に幼稚園という看板を立てて二枚看板にすれば文部省の予算も流れてくるのではないかとか、厚生省の精薄施設の中に分教場を設けるのはそれによって何人かの教員が配置され、手不足な施設が助かるために歓迎するといったような傾向が感ぜられる。保育所や施設の職員は自分たちのやっていることが子どもたちにもっともよい指導との誇りを持っているならば、外部からの派遣教師は拒否すべきであるし、また自分たちの要求をどんどん厚生省にすればよい訳である。同じ意味で、もし家庭教育で十分幼児をよく育てる条件があり、自信があるならば、わが子を幼稚園にやることだけに血眼になることをやめて、家庭教育で立派に子どもを育ててもよいはずである。

二、今までは保育所を幼稚園と異質なものとして論じたが、両者は目的がちがい、保育時間が相異するが、子どもに対する働きかけにどのくらいの相異があるだろうか。保育所の年少児と幼稚園児には明瞭な相異がある。しかし四、五歳児の同年齢児に対する働きかけは、いかに相異するだろうか。このためわれわれは東京、港区における保育所と幼稚園に行って、保母や教師の子どもに対する働きかけを、詳細に、タイムスタディ式に調査した。そして保育行動を次のように分類して記録した。これは三十秒単位の観察記録であって、それぞれの三十秒間にとられたおもな保育行動をこのいずれかにあてはめたものである。

●教育的行動

健康…体操・運動的遊び・健康についての話など

社会…行事・社会生活に関するもの、対人関係（けんかも含

める）・役割・当番など
自然…動物飼育・植物栽培・自然現象に関するもの
言語…お話・絵本・紙芝居・劇、あいさつ（出席をとるときの返事も含める）
音楽・リズム…歌・楽器・リズム遊びに関するもの
絵画・製作…絵・製作・粘土・砂遊び・積木・パズルなど

●生活指導

集団行動…集合・移動・整列など集団行動に関するもの
生活指導…片づけ、掃除、持物管理など

●養護行動

食事…食事準備・食事の世話・食事態度指導、肝油を服用させるなど
睡眠…昼寝準備・就寝の世話など
清潔…うがい、手洗いの指導や世話、怪我の手当など
着衣…ねまきの着替え、靴・園服・帽子・カバンなどの世話
排せつ…排せつをうながす、排尿便の世話をするなど
その他愛情的接触…身体的接触（抱く、手を握る、愛撫）、一緒に遊ぶ、訴えを聞く、世話をやくなど

●保育以外の活動

保育準備…整理整頓・掃除・後片づけ・移動、および保育内容に関する準備
記録…子どもの行動記録、連絡帳記入、製作品に名前を記入するなど
面接…父兄とのあいさつ、話しあい、父兄との電話連絡
自己研修…保育に関する自己研修（製作品を作ってみる、ピアノ楽譜をしらべる、保育関係の雑誌や本をよむなど）
食事・休憩他…食事や休憩、身支度など保育者自身のための活動

子どもに対して、一斉指導の形で保育領域に関した指導をしている形は容易に教育的機能を行なっていると見ることができる。しかし、どこまでを教育的機能とするかには意見も分かれようが、個々の保育行動から比較できるようにした。

あるいは子どもが鉄棒で遊んでいる場合に危険がないことをはたで見守っていたり、ただ鉄棒で保母と一緒に遊んでいたりという場合は養護的行動とし、子どもが自分で足をかけて登るのを教えるために手助けしてやった場合は教育的行動の方に入れたりした。また三十秒間に二つの機能が見られた場合には、それぞれのカテゴリーに二分の一点入れる形で集計した。

その結果五つの保育所と、五つの幼稚園における合計では表1のようになっている。

表には各行動の比率を出すために百分率でも表わした。しか

表1　一日の平均

		平均		%	
		保育所	幼稚園	保育所	幼稚園
養護	食事	43.7分	33.7分	11.0%	14.0%
	睡眠	46.6	0	11.8	0
	清潔	9.8	2.3	2.5	1.0
	着衣	19.9	5.9	5.0	2.4
	排せつ	1.5	2.2	0.4	0.9
	愛情接触	21.4	24.8	5.4	10.2
教育	健康	9.9	10.8	2.5	4.5
	社会	8.6	6.9	2.2	2.8
	自然	0.1	1.4	0.0	0.6
	言語	35.1	52.4	8.9	21.6
	音楽リズム	30.2	16.8	7.6	7.0
	絵画製作	20.5	27.4	5.2	11.3
生活指導	集合他	10.9	23.1	2.7	9.5
	しつけ他	7.9	8.0	2.0	3.3
保育準備その他	保育準備	32.6	14.3	8.3	5.9
	記録	30.1	0.3	7.6	0.1
	打合せ	36.8	4.0	9.3	1.7
	面接	3.7	0.6	0.9	0.3
	自己研修	4.8	0	1.2	0
	食事休憩	21.7	7.1	5.5	2.9
計		395.8	242.0	100.0	100.0

表 2

	午前		昼食		一日	
	保育所	幼稚園	保育所	幼稚園	保育所	幼稚園
養護	12.6分 (12.0)%	25.0 分 (17.1)%	43.9 分 (61.3)%	41.1 分 (70.3)%	142.9 分 (36.1)%	68.9 分 (28.5)%
教育	71.1 (67.5	79.4 (54.5)	4.6 (6.5)	3.7 (6.3)	104.4 (26.4)	115.7 (47.8)
生活指導	6.6 (6.2)	19.1 (13.1)	1.4 (1.9)	3.1 (5.3)	18.8 (4.7)	31.1 (12.8)
保育準備 その他	15.0 (14.3)	22.3 (15.3)	21.7 (30.3)	10.6 (18.1)	129.7 (332.8)	26.3 (10.9)
計	105.3 (100.0)	145.8 (100.0)	71.6 (100.0)	58.5 (100.0)	395.8 (100.0)	242.0 (100.0)

し元来保育所は長時間であり、午睡とか、自由遊びのような時間があり養護的行動が多くなるのは当然あるので、午前中だけを取り出して幼稚園と保育所を比較しまた昼食事の行動をも比較した。（表2）

これで見ると、幼稚園と保育所の間の保育行動にほとんど差はなく、教育的機能とみなされる部分はむしろ保育所の方に多くなっていた。また観察による印象によると、両者に差はないように見え、むしろ保育所の保母さんの方に一斉指導や訓練的態度が多く意識的に教育的であるようだった。

幼稚園の方がむしろ自由保育的指導で、子どもの遊びを巧みに誘導しながら保育していた。したがって保育所は教育的でない、教育的刺激分量が少ないとはいえない。

また子どもに対する働きかけを、積極的と消極的、否定的に分けて整理すると表3、表4の如く、保育所の方が幾分積極的と否定的が多くなっており、また全体的働きかけ、個人的働きかけからいうと、保育所の方に個人的働きかけが多く、幼稚園の方が全体的働きかけが多くなっている。個人的働きかけの多いことが、保育として、また教育としてものぞましいわけであろう。

なお、この研究の対象となったものは限られた保育所と幼稚園であり、しかも港区の保育所は設備、陣容において特にすぐ

表3　子どもへの働きかけ（積極・消極・否定）

	保育所		幼稚園	
	実数（分）	%	実数（分）	%
積極	149.9	(56.31)	84.7	(55.07)
消極	98.2	(36.89)	62.6	(40.70)
否定	18.1	(6.80)	6.5	(4.23)
計	266.2	(100.00)	153.8	(100.00)

表4　子どもへの働きかけ（全体・個人）

	保育所		幼稚園	
	実数(分)	%	実数(分)	%
全体	154.5	(58.04)	101.7	(66.12)
個人	111.7	(41.96)	52.1	(33.88)
計	266.2	(100.00)	153.8	(100.00)

れたものではある。しかし今日保育行政は着々と充実しており、その一人当り措置費と幼稚園における教育費と比べてみても、措置費の方がはるかに高くなっており、将来保育所はますます質的に向上してくると期待される。したがって、ここに現われたような傾向はやがて多くの保育所においても実現されるといってよい。

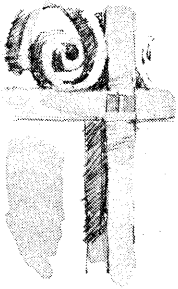
以上の点から考えても保育所では教育的機能が少なく、子どもを託児しているだけであるという偏見は間違っており、家庭保育に欠けた子どもに対して、長時間の教育と養護を兼ねた保育を行なっている、といってよい。そしてこの姿を幼児に対する適切な教育とみて、それを尊重すべきではなかろうか。設備や保母の資格などにおいて劣る点があるならば、それを充実するように援助すればよい。

（青山学院大学）

◇講演◇

昔話のユング的解釈・その四
―いばら姫―

河合隼雄



「いばら姫」の話の変遷

「いばら姫」というのはグリム童話の題でして、ペローの方では「眠りの森の王女」という題です。

この「いばら姫」というお話は（他のもそうですけど）グリムが話を収集して一八一二年ごろに一度本を出します。そしてその原稿を書いて、あと、グリムは何度も書き直します。そして、最後の一八五七年の原稿が今一般にでているわけです。ところが、一八一二年の原稿から一八五七年までだいぶ変わっているのです。例の「カエルの王様」も相当変えられています。その間にどういうふうに変えたかというと、ウィルヘルムは、話を上等にしたいわけですね。だから一八一二年の話に比べると、一八五七年の話の方がはるかに文学的になってきているわけです。ちょっと読んでみます。一八一二年のいばら姫の文章はこんなのです。

〈ある王様とおきさきの間には、一人も子どもができませんでした。ある日、おきさきが水を浴びていると、水の中から一ぴきのカニが陸にはい上がってきて「あなたは間もなく女の赤ちゃんをお生みになるでしょう。」と言いました。すると、果してその通りになりました。喜んだ王様は、盛大なお祝いを催しました。

国内には、仙女が十三人いたのですが、王様は金の皿を十二枚しかもちあわせていなかったので、十三人目の仙女は呼ぶことができませんでした。……〉

こんなふうな言い方です。それが一八五七年になるとだいぶ長くなります。

〈昔、王様とおきさきがいました。お二人は、毎日「ああなんとかして子どもがほしい」と言っていましたが〉
こんなのなかったですね、こういうのがでてくるわけです。そして……
〈いつまでたっても、子どもはできませんでした。
ところがある時、おきさきが水を浴びていますと、〉
この辺は同じですね。ところが、一ぴきのカエルになってるんです。どこでカニがカエルになったかわかりませんが、
〈一ぴきのカエルが陸へはい上がってきて、「あなた様の願いはかなえられるでございましょう」といいました。
カエルの言ったことがその通りになり、おきさきは女の子をお生みになりました。
姫君は、美しいお子さんでしたので、王様は喜ぶあまり、なすところを知らないありさまで、盛大な宴会をお開きになりました。王様は、親戚や友だちや知り合いの人々ばかりでなく、不思議な力を持っている仙女たちをもお客様としてお招きになりました。この女の人たちにも、姫をかわいがってもらいたいと思ったからです。
王様の国には、そういう仙女は十三人いたのですが、そういう人たちに食べていただく金の皿は十二枚しかなかったので、中の一人はお招きからもれることになりました。〉
ちょっと今、読みましたが、あとの方が文学的になってきてます。たとえば眠っているお姫様がおき上がるところなんか、
〈王子が城の中へ入ると、眠っている姫にキスをしました。
すると何もかも眠りからさめました。そして二人は結婚しました。
もし二人が死んでいなければ、まだ生きています。〉
これが一八一二年の方です。ついでに言いますと、「もし二人が死んでいなければ、まだ生きています」というのは、前に話しました一種の「わく」のための言葉と考えられます。
ところで、一八五七年になると、えらく文学的になります。たとえば、
〈いばら姫が眠っている小さい部屋のとびらを王子があけました。いばら姫はそこに横になっていましたが、あまり美しいので、王子は目をそらすことができず、身をかがめて姫にキスをしました。王子がキスをしてくちびるに触れたとたんに、いばら姫は目をさまし、眠りからさめ、いかにも親しそうに王子をみつめました。
そこで二人は一緒に塔をおりて行くと、王様もおきさきも、宮廷の人々もみんな目をさまし、あっけにとられたように互

いに顔を見合わせました。

すると前庭では馬がおき上がって体をゆさぶりました。猟犬が飛び上がってしっぽをふりました。〉

こんなの何もなかったのに、全部でている。

〈屋根の上のハトは翼の下から頭をだしてあたりを見まわし、野原の方へ飛んで行きました。カベにとまっていたハエははいだしました。台所では、火がゆらゆらともえ上がって食べものを煮ました。焼き肉は再びじゅうじゅうと音をたて始めました。料理番は、見習いの横つらをはりとばしたので、少年はわっと叫びました。女中は、ニワトリの毛をむしり終えました。

それから、王子といばら姫とのご婚礼が大そう立派にあげられ、お二人はこの世を終わるまで楽しくすごしました。〉

だいぶ変わっているでしょう。しかし、すじはなんとも変わっていない。つまり、文学的な潤色がほどこされているだけです。たとえば、「目がさめておわり」ではおもしろくないので、ハトがどうした、番人がどうしたということをずっと書いているわけですね。文学的にして、長くしているわけですけれど、われわれがメルヘンの解釈を考える場合はあんまり問題になりません。われわれは、すじ、骨の方を見ているわけですから。それがペローの方へいきますと、またずいぶん違います。おそらく二つの話が一つになったのだろうと思います。

さっき話が書き変えられたといいましたが、このことについては、たとえば、講談社の現代新書の「メルヘンの世界」(相沢博)にのっています。これは私の言うような心理学的解釈ではなくて、いろいろエピソードとかおもしろいことが一通りさっと書いてあります。一番初めに言いました、いばら姫やカエルの王様がどういうふうに書きかえられたかということは、「グリム兄弟」(高橋健二)にも少しのべてあります。

お話は皆さんよく知っておられると思いますので省略して、さっそく解釈をしてみることにしましょう。

これは、主人公はいばら姫、この女の人です。話の提示という点からいいますと、

〝王様とおきさきがいた。子どもがなかった〟ということは、この家では、新しい可能性というかあとつぎというか、そういうものがでてこなかったということで、人間の心にたとえると、私の心の中で王様は現代の自我、おきさきがいてある程度の国がおさまっているんだけれども、次にもう一つ新しく国が変わらねばならない。もう一つ新しい変革がおこらねばならないんだけれども、何を変革するのやら、何が変革されるのやら、

どういう可能性がでてくるかわからない時代、待っている時代です。

ここで王様が病気になって死ぬというのがよくあるテーマですけども、これは、そうじゃなくて、そこへお姫様が生まれてきますと教えてくれたのは、カニ、あるいはカエルだということです。

カエル

カニとカエル、どちらも共通する点は、水と陸と両方に両生する点です。これは心理的にいうと、無意識の世界の方は海で、意識の方が陸です。だから、水の中から陸へ上がってくるというのは、そういう意味で、無意識の世界から意識の世界へ入りこんでくる何かの可能性の意味をもっていまして、カエルというのは、よくでてくるわけです。

カエルというのは、無意識的な内容が変革して、可能性が意識化されうるというような時によくでてきます。逆にいいますと、カエルが予言するということは、その変革の可能性を人間としてはまだ知ってはいないわけです。

この王様の場合は、いかに自分らの王国がかわっていくか知らない。われわれの自我がどのように変化、変遷するかは私自身もはっきりわからない。その時に、無意識はよく知っていて、無意識の世界から、「あなたは変わる可能性がありますよ」と信号をだしてくる。その、信号をだす者としてもカエルがよくでてくる。可能性そのものとしてもでてくるし、それを告げる者としてもでてくるわけです。

あるいは、日本の神話をとりあげますと、少名毘古那命を知ってますか？　古事記にでてきます。大国主命が出雲の国を治めていますが、その時、小さい小さい神様が現われます。それが少名毘古那命です。その時に大国主命が、「一体あれは誰だ」ときくんですがわからない。そして、一番もの知りに聞こうと、カカシにききます。おもしろいですね。カカシが物知りだというのは。カカシは一本足でどこにも動けませんから、あちこち見てまわらない者こそ物知りだ、という一つのパラドックスですね。そういうパラドックスがありまして、カカシにきくのです。カカシが「あれを知っているやつはおれじゃなくて、あいつにききにいけ」と言ったのがカエルです。カエルの所にききに行ったら「あれは常世の国から来られた少名毘古那命である」という。これと同じですね。つまり、新しい可能性の発展を告げ知らす知恵をもったものとしてのカエルです。

だから、そういうテーマというのは、本当に世界共通です。

カエルというのはおもしろいものですね。ユングが言ってますが、カエルというのは手が人間的な手をしています。人間的でありながら絶対人間じゃないですからつまり、人間になる前の可能性ということです。そういう点で人間になる前の可能性として出現したカエルとして一番よく知られているのは、カエルの王様ですね。これはグリム童話の一番初めにのっている話です。

「カエルの王様」

王様と娘がいて、末娘がまりをころがすんです。そのまりが泉の中に入ってしまう。娘は「誰かあのまりをとってこないかしら、あのまりさえひろってくれたら何でもあげるのに」と言います。そしたらカエルがでてきて、「まりを返してあげるかわりに、私と結婚してほしい」というのです。

そしたら、どうせこんなカエルが来るわけないと思って「いいです」というわけです。そして約束したところが、ある日、ヒタヒタと音がしてカエルがやってくるわけです。そして娘はそれを見て、ギャーとびっくりして、あんなバカやろうと結婚なんかするものかと思ったところが、お父さんが「絶対にいけない。お前が約束したのなら必ずしなさい」という。これが父親の原理です。母親というのは「あんたそんな約束したの？いくら約束してもいいよ。カエルがいやなら殺しなさい」――これはお母さんです。うちの子さえよかったら……。お父さんの原理は「たとえお前が不幸になろうとも、約束したことは守りなさい」です。

日本では父親の原理が非常に弱いですね。母親の原理の方が強い。アメリカやスイスへ行ったら、本当に、父親の原理の強さを感じます。

この場合、「カエルの王様」の方は、カエルに会ったお姫様にはお母さんがいないでしょ。母性原理がなくて、非常にきびしい父親の原理によって、ついにカエルとの結婚を決意させられる。決意させられて自分の部屋にカエルをつれていくんだけど、娘はいやでいやでしょうがないわけです。いいかげんに逃げ出したらいいんですが、カエルはヒタヒタヒタヒタとやってきます。最後はあまり腹がたつのでカエルをひっつかまえて壁になげつけます。すると王子様になります。

つまり、逃げてばかりいてはだめで、最後のところは決然として勝負しなければならない。そして、その決然たる勝負というのは、いかに残酷であっても、やりぬかねばならない時があります。その決然たる勝負を残酷にやりぬくことによって成功

するという例は、前に話しかけてました「黄金のとり」の最後です。王子がキツネに「お礼はどうしたらいいか」というと、「お礼に自分をうち殺して、手足を切りとってくれ」というんです。そして、王子が「そんなむごいことは絶対にできない」となんべんもことわるのです。ところが最後にあんまり言うから、うち殺して手足を切ったら、そのキツネが王子様になるわけです。つまり美しいお姫様の兄さんです。

われわれが魔法をとく、あるいは一人の娘が男を獲得して結婚する、妻となりうるための決然たるものというのは、もう、お父さんの力をかりない。お父さんは命令を下すけれども、最後の力というのは、娘が必死になってカエルをたたきつぶすことです。そういう時に初めてここにあがないのテーマが表われます。血が流れなかったらあがなえないということがどうしてもあります。それでこそ、結婚ということが成就されます。

「カエルの王様」というのは、そうしたすさまじさすごさを非常にきれいにのべている話だと思います。そしてこの時に決然とやれなかったら、一生カエルと暮らさなきゃならないんです。いやだいやだ、なんでこんなことになったんだろう、と思いながら。実際こんなふうに思いながら、カエルと一生結婚している人もたくさんいます。

カエルを決然として壁にぶつける所というのは、昨日言いました炭焼き長者の娘が決然として離婚して炭焼五郎の所へおしかける、あそこですね。そういうのは、女性の中の父性原理です。女だって、生きようと思う時、男性性がなければだめなんです。いばら姫にもでてきます。男性だって女性性がなかったら人間じゃないし、女性だって男性性がなかったら人間じゃないわけです。ところが、いつどこで、いかにそれをたたきつけるか。あんまり早いことたたきつけたら、カエルが死ぬだけで、しまったと思う。そのタイミングがむずかしいわけです。

このあと、カエルの王様の方は、忠義なハインリッヒという話がついています。ハインリッヒというのは、実はカエルの王子様の家来で、王子がカエルになってから、悲しくて悲しくて、悲しむのをやめようとして心に鉄のタガをはめていたのです。ところがカエルは王子にかえるし、結婚してうれしいので、馬車のうしろにハインリッヒが乗っていたら、あんまりうれしいので鉄のタガがだんだんとれていくという話。

忠義な男、ハインリッヒというのは、また、童話お得意のテーマでして、そういうふうな男性像、つまり悲しむことをやめた男性、カエルになってた男性、カエルと結婚すると約束したのならやりぬけといった男、一人の女が妻になっていく間にい

ろいろ出会わなければならない男性像がうまく書かれています。

じかし実は、「カエルの王様」は、「忠義なハインリッヒ」の話と、「カエルの王様」の二つが一つになった話です。だからちょっとちぐはぐしてますが、それでも一つの物語としてみると、この三人の男性像がでてきていることは、おもしろいと思います。実際に、男が男であるためには心臓のまわりに鉄のわくをはめて、悲しむのをやめねばならない時ってあるんですね。そしてやっぱり、うれしい時には鉄のわくも落ちていく時もあるのです。そういう感じがよくでています。そして、娘が妻になっていく時の非常に強いインパクトを与えた父親像というのが非常にきれいにでています。

いつも思うんですが、「カエルの王様」というのは、誰の話なのかということです。つまり、カエルの王様の話か、娘の話か、どっちが主人公かなと思うんです。どちらが主人公かによって考え方がかわってきます。どうも、この話はどっちだかわからなくなるんですが、私は女性の物語だと思ってます。浦島と乙姫の話というのは、あれはあくまでも男性の見た女性の話ですね。女からみた女の話ではないと思います。いろんな女性像がでてきても、女性が見た、感じた女性像と、男性が感じた女性像とはだいぶ違うと思いますね。乙姫なんていうのは、男の心にうかんだ女性のイメージという感じが非常に強いと思います。ここで女性の観点から、乙姫のイメージを考えてみることもおもしろいかもしれません。みなさん興味があれば、女性としての立場から考えてみてください。

もちろん、いばら姫は絶対に女の人の話です。

ところで、カエルというのは、そう思って見るといろんな所にでてきていると思います。「カエル」という本を書こうかなと思うぐらい。箱庭療法(注)にでてきたカエルを全部うつすだけでも、非常におもしろいです。実際、童話の中のカエルのイメージというのをやってみたって、ずいぶんたくさんできます。私は今、日本の神話とか、グリムのメルヘンだけをとり上げているのですが、これがイギリスではどうだとか、フィンランドでは、ロシアでは、と見ていくと非常におもしろいです。

おとぎ話のプロモーター・トリックスター

ところで、そういうふうにカエルに言われてお姫様ができる。カエルの言った通りになって、おきさきは女の子を生む。その子がとても器量よしなもんだから、王様はうれしくてたまらなくなって、酒盛りを開いて、身内の者や友だちや知り合いばかりでなく、わざわざ仙女（あるいはみこ）までよんで、そして

何とかしようと思ったのはよくわかりますね、親の気持ちが。魔法によってでもうちの娘を大切にしたい。

こういうのを心理学的にいうと、過保護の状態である、といいます。過保護をするとろくなことはありません。実際、身うちや友だちぐらいだけをよんでいたらよかったのに、なんとか魔法の力を借りてでもうちの娘をよくしたい、と願ったばかりに……。十三人のうち十二人分しか金の皿がないので、ここに一人余り役がでてきて、これがおもしろい。ご存知のように、十三というのは西洋では不吉な数です。十二というのは完全な、全きものを表わす数としてでてきます。ところが、これがまた人生のパラドックスでして、完ぺきなものは完ぺきでないのです。完ぺきなものが、より完ぺきになるためにはよけいなものが一つつかなければならない。つまり、十二人使徒＋キリスト。あるいは、十二人＋ユダ。ユダがいないと、キリストの神話は完成しないわけです。

これは、おとぎ話の非常に好きなテーマです。ここで、実際のところ、十三番目の仙女がでてこなかったら、このお話は完成しないのです。この物語は確かにいばら姫というのが主人公です。けれども、このお話のプロモーターは誰ですか？　十三番目の悪い仙女です。そう考えますと、実際に世界を動かし、世界を完結するためには、非常に異質な一つの因子が必要であり、われわれはそれを無視することはできない。

このテーマはくり返しくり返し、いろんなところにでてきます。たとえばヘンゼルとグレーテルで、彼らをあの森へおいやった母親こそがあの話のプロモーターなのです。常に悪なるものというのが話の展開に必要である、という考え方です。そういう考え方が非常にきれいにでてくるのを、トリックスターといいます。トリックスターというのは、一応いたずら者とか訳されています。いたずら者という訳は感じがよくないので、トリックスターとそのまま言いますが。このトリックスターについて私の最近の著書『コンプレックス』（岩波新書）に説明しています。あるいは山口昌男『アフリカの神話的世界』という本に、アフリカの神話にでてくるトリックスターのことがくわしく書かれていますので、興味のある人は参考にしてください。

トリックスターというのは、いたずら者ですね。どんなことをするかというと、要するに、悪いこと、しなくてもいいことをするのです。しなくてもいい悪いことをする人です。それから、いわなくてもいい本当のことをいったりする傾向のある人です。みんなのグループの中にもトリックスターがいると思います。たとえばみんなのグループで、ある人が新しい服を着て

きたとします。そしたら絶対に似合っていないということがわかっていても、みんな「いいの着てきたんね」とか「よかったわね」とかいう中で、たった一人「なんにも似合ってないじゃないの」って言ったら、一ぺんにぱっと白けて、次に言いようがない。というのは、あんまり本当のこというからですね。だからせっかく新しい服は何と素晴しい、何といいわ、とわあわあいっている時に、その気分を一ぺんにつぶしてしまうのですね。これは悪です。しかし、悪といえば悪ですけれども悪じゃないです。というのは、見せかけの完成を破壊するのは悪とばかり言えないからです。トリックスターというのは強力な破壊性を持っています。だからトリックスターというのはきらわれます。腹がたってしょうがないですね。腹がたつけれど、言ったことは本当だし、やっぱりみんな心の中では、似合ってないと思うわけだし……。そういうのをトリックスターといいます。

トリックスターのいろいろ

これは、どこの国の神話にも登場します。日本神話でいうと、「須佐之男命」がトリックスターになります。トリックスターの中の、最大の素晴しいトリックスターです。あれは非常に位が高い方です。もっと単純なのはみんなの知っている「吉四六さん」とか「彦一」とか、ああいうのがトリックスターです。ずるいことしたり、うまいことだましたり、本当のこと言わなくてもいいのに言ってみたりやってるでしょ。それからドイツの「ティル・オイレンシュピーゲル」というのがあります。みんな知りませんか？　リヒャルト・シュトラウスの「ティル・オイレンシュピーゲルの陽気ないたずら」という素晴しい音楽がありますね。

たとえば社長さんが、浄瑠璃をうなって、社員をみんなよんだ時なんて、みんなへたなことなんか絶対わかっていても「社長はうまい」とか「たいしたもんや」とか言っている時に「なんや社長、みんな寝てましたよ」なんてこと言うやつがいたら、一ぺんにふん囲気がつぶれるでしょう。そういうふうなことを常にやっているやつです。そのふん囲気がつぶれた時に、この社長がえらい人だったらハッと気がつくはずです。「あ、おれはへたな浄瑠璃をきかせて喜んで、バカなことをした。だからもうおれは、浄瑠璃は楽しみにはやるけれども、社員をよんできくのを強制したりはしまい」というふうに考えたら、新しい秩序ができるわけです。そしてみんなは社長をますます尊敬します。

うまくいったら、この一人の真実を語るやつのおかげでこと

に新しい秩序が生まれていくわけです。へたにいったら「みんな半分以上寝てましたよ」っていったら、シュンとしちゃって、次は「君、すまんけど会社やめてくれ」やめろと言われないまでもだんだん左遷されるかもわからない。あるいは、ここでみんなものすごい気まずい思いをしすぎたために、それから浄瑠璃会はおもしろくなくなるし、社長と社員の関係は悪くなってくるし、ガタガタして、社運はかたむくかもしれない。だから、トリックスターというのは両刃の剣なのです。うまくいくともものすごく建設的にいくし、反対にいったら完ぺきな破壊なんです。そういう両刃の剣を持っていながら、自分は何をやっているのかはっきりわからないのをトリックスターという。それを本当にわかっていて新しい秩序を自らもたらして全部改革する人、これがヒーロー、英雄です。トリックスターがすでに英雄にまで高められている時というのは、やっていることの意味を知りつつ「よし、ここで思い切って言わなかったらたまらない。クビになってもいいから、一つ言ってみよう」というわけです。ただし口から出まかせにバーッといって「あ、しまった」なんていうのは、これはトリックスターです。そう思うと、このトリックスターとヒーローの間に、いろいろと段階があるのがわかるでしょ。どんなところにも必ずトリックスターはいるはずです。それがいなけりゃ、世の中おもしろくないのです。そう思いませんか。そして逆にいるとおもしろくない時もある。いると、よくつぶしにきますから。つまり、なかなかとらえようがないものなのです。

それで、トリックスターがいないとどうなるか、といったら、安定した平和が続くわけです。安定した平和が続くということは、何も変わらないということです。やっぱり変わろうと思ったら、トリックスターが出てこなきゃいけない。でてきた時にへたすると完全な滅亡におちいるし、上手にやったら改革が行なわれる。

そういうふうにいいますけれど、実際はみんな心の中にトリックスターがいるはずです。心の中にトリックスターが二～三人はいるはずです。時々それがチョロチョロと、もの言いたそうにする。思わず言って「しまった」と思う時もある。しまったことしたと思っていたら、かえってあとでうまいことといく場合だってあります。

カウンセリングとトリックスター

われわれ心理療法家というのは、トリックスター的働きをする場合がよくあります。なぜかというと、人のもっている人生

観を破壊しなかったら変わらないわけでしょう。だから、変わらないでいる人を変えるためには私たちは意識的に、あるいは無意識的にトリックスターになることがあります。たとえば、こういう経験をしました。自分でもおかしくてたまらなかったのですけれど、それは意識的でなく、まったく無意識的にトリックスターに私がなってたわけです。

学校恐怖症の人がやってきまして、その人は大学生にはまだなれません。高校生ですが、三年ほど学校へ行ってなかったので、本当はもう大学生の年齢です。その学校へ行ってなかった子が私のところを訪ねてきたのですが、来る時がものすごく正確なんです。十時と約束したら、十時がなったら戸がさっと開くのです。本当に正確です。そんなふうにあんまり正確に来るから「あなた、ものすごく正確ですね」と言ったら、自分はもう、遅刻するのは大きらいで、人間が人間と約束をしてこれを破るというのは一番いけないことだ。だから自分は十時と約束したら、十時十分前に必ずそこへ到着しています。そしてそのまわりをぐるぐる歩いているんです。そして十時という時にパッと入るわけです。すごい人でしょ。だからそれをきいた時に私は思わず「あんたってすごいんですね。それだったら今までに、遅刻、欠席全然ないんでしょう」といいました。その人もつられて「私、遅刻も欠席も……」といいかけてはっと気がついて「欠席ばかりしてました」つまり、学校恐怖症だから休んでばかりいたのです。その人の欠点にズバリとふれるような言ってはならない真実を私は思わず言って、その時の私というのは、無意識のうちにトリックスターにならされていたわけです。

ほんとに、この場合なんかは非常に成功します。なぜ成功したかというと、私が「遅刻、欠席全然なし」と言ったらその人も思わずつられますからねえ。「はあ、私はもう遅刻欠席はええ……で私は……よく休んでます」三年間休んだわけです。で、私がその時言ったのはあなたほど遅刻しない人はめずらしい。しかし遅刻をしたり、約束を破ったりしている人は今、大学生になっているのに、遅刻を一ぺんもしていないあなたは、高校三年生にとどまっているというのは、非常におもしろいと思いませんか？

これをどういうことかと言ったら、あなたのそのようなものすごい正確度ということは、あなたの進歩を止めているんではないか。つまり、この正確さをこわさねばならないということです。これは一つの破壊ですね。破壊せよ、ということを非常にきれいに言えたわけです。ここでこのようなやりとりがなく、単に「あなたはあんまりがっちりしすぎてますから、もう少し

ルーズになった方がよろしいでしょう。」などと忠告したってだめです。やっぱり、こういう思わず出てきたことでバチンとあたってこそきれいに通じるわけですね。実際カウンセリングをしていて思いますけれど、このようなことはなかなか意図的にはできません。そんなうまいことというのは、意図的にはできません。こんな点はスポーツによく似ています。思わずパーッとやったらゴールにさっと入った、なんてことよくありますね。その時は思わず入ったからまぐれ、ではなくて、やっぱり練習を重ねた人ほど、思わずやったことがみんな法にかなうでしょう。あれと同じことで、カウンセリングの場合、思わず言ったことが法にかなっていて、あとでわれながらうまくいったな、と思うことがよくあります。そういうのは、あとでうれしくてしょうがないです。それで、誰が、私がうまかったのか、私の心の中のトリックスターがうまかったのかわかりませんけれど、そういう点でカウンセリングというのは非常にトリックスター的要素が必要です。

「いばら姫」に見るお国ぶり

さて、話をもとにもどしますと、非常に美しい王女様が生まれて、王様もお姫様を待ちうけていて……。そうですね。待ちうけていて出てきた女の子。みんなが喜び、仙女までが喜んで、一番めにみさお、次には宝をさずけます。ところでそれだけ完べきな女というのは幸福になるはずがないのです。幸福になるためには、十三番目のものがいるのです。ここでトリックスターが、この女性の幸福のために一石を投じるわけです。

ところでおもしろいことに、ペローの話ではもらう物が違うのです。グリムの方では、正しいみさおと、よい器量と、お宝をというようになってますけれど、みなさんだったらどれが一番ほしいですか？　何をもらったかというところでは、わりあい、文化圏とか、そこの社会とか、時代とかを反映していると思います。おそらく今だったら、一番初めに正しいみさおをくれたりしないと思います。ペローの方では一番初めにもらったものは、「王女様は世界中で一番美しい方になるでしょう」で、ここで美貌を一番にもらっています。フランスらしいですね。フランスとドイツは全然違います。ドイツの方はみさおをもらうし、こっちは美貌が一番だし、二番目は「天使のように賢い方になるでしょう」賢さというのを贈るわけです。三番目は「何をなさるにも大変しとやかになさるでしょう」四番目は「とても上手にダンスをすることができるでしょう」。おもしろいですね。ダンスということが、どれだけ大事な教養であった

かというのがよくわかります。ダンスができなかったら絶対にデビューすることができません。

前にもたしか話しましたけれど、女の人というのはある年齢に達した時に、社交界にデビューするわけです。それまでは子どもなんです。それまでは子ども扱いで、子どもとして勝手なことをしていてもいいんです。社交界に出る時の一番初めは舞踏会です。そしてその時に踊ることによって、これから結婚する可能性のある娘として現われた、ということになります。だからダンスが非常に大事になってくるわけです。今でもそういう風習はまだ残っているのじゃないでしょうか。それから五番目の仙女は「うぐいすのように美しい声で歌を唄うでしょう」六番目の仙女は「王女様は、どんな楽器でもこの上なく上手にひけるでしょう」といいました。

そういうふうになっていてペローの方では仙女の数も八人になっています。これは、いばら姫の方は十三人。非常に感じがよくあらわれてますね。ペローの方は七プラス一の八人。これは実は八というのも意味がありまして、ある意味で完全さを表わすものとしてよくでてきます。四というのが一つの完全なものです。ところが七というのは、これはユダヤ教では七という一つの完全数と考えていいのです。国ぶりによって違うのです。だから、ある種の完全数に対して、また一つの完全数ができるという考え方が入ってくるだろうと私は思います。もっともこれはそこまではっきりとは断定できないようです。

贈り物は、ペローの方の贈り物と、いばら姫の贈り物とは違います。だから初めに言いましたように、おとぎ話の研究というのは、いろんな研究ができる。何も心理学的なことばかりじゃない。こういうところを調べることによって、フランスやドイツのそのころの風俗の相違とか、国民性の違いとか、そんなことがずい分わかるでしょう。いばら姫のバリエーションを探していって、イギリスだったら第一の贈り物は何だったろう、とか、そんなことを考えていくのも非常におもしろい研究の仕方だと思います。私はもちろん心理的なことばかり考えていますから、あまりそういうのには興味をもちませんが、おとぎ話というものは、いろんな側面から研究できる、ということがわかると思います。初めにいろいろ言いましたけれど、やっぱり自然現象との類比という考え方だってできたってかまわないと思います。いろいろな考え方でいいのです。

死・運命

ところで、トリックスターの十三番目が入ることによって、

話が展開しますけれども、そこで言ったのは、「十五歳の時に、つむにささってくたばるぞ」と言うのですね。これはどういうことかというと、これは「死」です。死ぬということです。ところで、死イコール悪と思う人は多いと思います。われわれにとって悪とは何かというのは非常に問題ですけれども、死の神というのは悪だという考える人はずい分いると思います。

しかし、人間が生きていくためには、美貌であるとか、お金であるとか、みさおであるとかが必要ですが、それに死ということが加わらなかったら完全ではないのですね。死ということがなかったら、生ということの意味がなくなってしまう、生を生たらしめるために、やっぱり死ということがいるのです、といっても、十五歳でくたばるのは早すぎます。これは困ります。

ところで、十五歳というのはどんな年齢でしょうか。これは日本であれば、男子が元服してた年ですけれど、結局、今まで子どもだったのが一人前の娘になる年です。いってみれば、十五歳というのは悪ということがわかるようになる年といっていいかもしれません。これがわからなかったら大人になれないわけです。

悪い仙女は王女が十五歳の時に刺されて死ぬといいますが、実は、まだ十二番目の仙女が残っておりまして、これがさっきもいいましたがバレーの場合は、たしかライラックの精だったと思います。それが「のろいをとりのけるわけにはいかないけれども、力を弱めることはできる」といいます。これが非常におもしろいところで、十五歳で死ぬという運命を授けられた場合には、その運命を全く変えるわけにはいかないが、これを弱めることができるというのです。これもひとつの真理だと思います。たしか、前にもそういうことを言ったと思いますが、人間に実際、運命というものがあるのだろうか、ということになります。みんなはどう思うか知りませんが、若い時というのは運命なんかはないと思いたいでしょうが、私のように年よりになりますと運命があるような気がします。ただし、運命というものがあるといっても「生まれた時からあなたは、プロ野球の選手になる運命がある」とか「腸チフスになって死ぬ運命がある」とか、「交通事故にあう運命にある」とか、そんなふうには、決まってないように私は思います。わかりませんよ、それも実際考えたら、そうと思わざるを得ないときもありますからね。悪いことをしているやつが平気で生きてるのに、一番よいことをしている人がどうして交通事故にあって死なねばならないのか。つまり、それは運命だった。そう言うとかたがつくわけで、それを運命以外のことで説明しようと思っても、なかなか答の

出しようがないわけです。

運命というテーマも、昔話の好きなテーマでして、それは昨日読んだのにもありましたね。塩一升の位と竹一本の位と生まれた時からきまっている。塩一升の位で生まれた子は塩一升であるし、竹一本に生まれた子は竹一本である。どうも、その程度のことは決まっているのかもしれません。竹一本の位に生まれた人間というのはどうしたらいいかというと、竹一本の位に生まれているのに塩一升の位の娘と結婚したりするから駄目なんです。でこの人は、あの竹細工でもして生きていたら本当に一生幸福だったろうと思います。実際に私は思うのですが、百万長者になるということと、竹細工をして一生を生きることと、どっちが幸福かわかりません。私はたくさんの人に会いますので、人間の幸福ということについてつくづく考えさせられるのです。みんなが普通に考えるように、お金があるからといって幸福だとはかぎらない。ただしお金があった方がよいとはいつも思っていますけれど。といって、別にたくさんあるからよいとは簡単にいえません。

たとえば、すごい遺産をもらって、うつ病になった人がいます。結局、遺産をたくさんもらうでしょう。すると、みんなが悪口を言うわけです。「あいつは力もないのに遺産をもらったおかげでえらそうにしている」とか、「あいつは何にもしてない。ただ単に遺産をもらって遺産のお守りをしてるだけじゃないか」とか言われるわけです。そしたらものすごく腹がたってくる、といって無茶苦茶して遺産をつぶしたら、どんなことをまた言われるかわからない。そう思うとうつうつして心因性の抑うつ症になってしまった人があります。その人の話を聞くと、一番の原因は何かというと非常に大きい遺産をもらったことです。だからわたくしは、その人の診断は「遺産過多症」だと言ってたのです。(笑い) 実際に遺産過多というのは大変なことです。

こういうふうに考えると、人生というものは本当に何が幸福かわからないです。ほんとに何が幸福か、そう思うと人間に与えられた運命などというものは、幸福な運命とか不幸な運命ということは無いのではないかとさえ思います。運命そのものは幸福でも不幸でも何でもなくって、何か言葉でも絵でも表わせないようなものと思います。そして、幸福とか不幸とかは、われわれの受け取り方によって生じるように思います。

カウンセラーとクライエント

私はカウンセリングをしていてよく思うのですが、結局クライエントというのは自分で直っていくわけです。自分で直って

いくということはカウンセラーは何もせずにいるということに意味があるのです。これは私がたとえによく言うのですが、カウンセラーというと指揮者みたいなもので自分は音をならさないけれども、クライエントの演奏を指揮して、そうしてオーケストラにする。そういう感じに似たところがあります。そういうふうに考えますと、演奏する楽譜を一体誰が書くのかという疑問がおこります。カウンセラーが指揮者でクライエントが演奏家とすると、一体誰が楽譜を書くのか。ここで私は、楽譜は「運命」が書いている、そうしてわれわれは生まれた時から楽譜をもらっていると考えてみる。あなたは、これをやりなさいと。その時に同じ「運命」でもＮＨＫ交響楽団が演奏したら、みんなお金を払って聞きにくるけれども、京都大学の交響楽団の演奏ではそれほどは聞きにこないですね。でもみんな同じ「運命」です。みんなダダダダーンってやるのですけれどもやっぱり違う。同じ楽譜を与えられても演奏の仕方で違ってくる。たとえば、ベートーベンの運命とフォスターの草競馬でしたら、それは運命の方が素晴らしいというけれど、下手なオーケストラが運命を演奏したってみんな聞きにこない。けれども、すごい歌手がフォスターの歌をうたったらみんな聞きにきます。そしたらどっちがどっちと簡単には言えない。というようなことを言ってたのです。

それでも、楽譜が全部書いてあるというのはあんまりひどすぎるので、このごろちょっと考えを改めまして、楽譜は全部書いてないけれども、われわれの運命というのは動機みたいなもので、われわれ生まれた時に動機をもらうわけです。たとえば、・・・—とこういうふうな動機をもらうわけです。またあるいは、—・—というような動機の人もある。そういうのをもらうけれども、その動機をもとにしてどんなメロディーを歌い上げるかということがわれわれの人生であると思います。同じ動機をもらってもベートーベンだったらダダダダーンとやるからみんな聞きにくるけれど、われわれがやると駄目なわけです。同じ動機でも全然違うものができますから。実際に運命交響楽を聞くとあの動機が何遍も何遍もくり返されていることがわかります。だからすごい天才などというのは、ふとある日ひとつの動機が心に浮かぶのだと思います。そして、その動機をもとにしてきれいなメロディーができあがっていくし、いくらでも展開していくわけです。ところで、私たちはたとえばダダダダーンというような動機をもらったとしても、タタタターと走って電車に衝突して死ぬかもわからない。これもひとつの動機です。だから私はそういうふうな程度の運命が、字にも絵にも書けな

いけれどもあるように思います。

しかしそれにどのような旋律をつけ、どう演奏するかということが私たちの人生であるし、そして、なろうことなら折角与えられた動機であるならば、あたう限りのバリエーションを歌いあげたいと思います。これを何と言いますか？　自己実現と言うのです。その可能な限りの変奏曲を歌いあげて、そして可能な限り美しく歌って死んでいきたいというのが自己実現だといっていいと思います。

「生まれ子の運」

ところで「運命」ということをとりあつかった、おもしろい日本の昔話があります。それは「生まれ子の運」といって、この前読みました「炭焼き長者の話」とよく似たところがあります。「昔、男がありました。女房が身もちになったので丹波おいの坂の、子やす地蔵に願をかけました。男が地蔵の堂で通夜をしていると、よその地蔵さんが来て『他にお産があるのでお前行ってくれ』とさそいましたが、子やす地蔵は『客があって行けない、お前行ってくれ』とことわっていました。そして明け方によその地蔵は帰って来ました。『ごくろう』と子やす地蔵が言うとその地蔵は『寿命は十八の寿命に決めてきました。その時に京の桂川の主にとられることになる』『ごくろう』ということで、もう決まっているわけです。だからこの人は自分の息子が十八歳で桂川でおぼれて死ぬということを聞いてしまうわけです。

それからどうなったかというと「その男は京の桂川のせぶりを請けとる役人になり、子どもは大変親孝行でした。そして十八歳の時に桂川が大水になりますと、子どもがお父さんに『お前の代りにせぶりに行く』と言いますがお父さんは『十八歳で桂川で死ぬ』と知っているから『絶対に行ってはいかん』と言って止めるわけです。」このお父さんが『絶対に行ってはいけない』と止めるところは「いばら姫」の話でいうと「王様は、その国中のつむを全部燃やしてしまいました」というところですね。それが人間の知恵というものです。人間としてできる限りの事をしたいと思いますけれど、そんなことは運命の力よりは、はるかに弱いのです。この場合でも、折角そう言っているのに結局、親の目をしのんで、子どもは出ていってしまいます。それからが日本的なのですが、お父さんはどうしたと思いますか。『親戚に来てもらって葬式のこしらえをせよ』というと女房が『あほなこと言うな』といって怒ります。しかし何やかやと言って葬式の用意をするのですね。ところで十八歳の男の子は朝

飯も食わずに出て行って腹が減ったので餅屋へ行きます。するとかたわらに立派な娘が腰かけています。『ねえさんまあ食べんか』と言うと『わしも食べさせてもらおう』と言って、その娘さんは食うわ食うわ無茶苦茶に食う。そして百貫からの餅を食ってしまいました。(笑い)百貫てどれだけか、大分すごいと思います。そこで店の主人が『払うてくれ』と言うと息子が『おれはぜに一文も持たぬ。しかしそのまた後に来るけれどもお前の家に印として編み笠をかけておいてくれ。わしが、もしも死んだらこらえてくれ』と言って出かけます。

その後、娘と連れだって桂川の土手に行きます。そしたら娘が『わしは、ここの主だ』というのです。そして『お前は十八歳の寿命でここで死ぬはずだったけれど、わしにあんまり餅を食わしてくれたので六十一歳まで延ばしてやる』で息子は、『やれやれえらい事になった』と言って、(笑い)つまり金を払わないといけませんから、それで帰りに餅屋へ寄って『実はこういう事で六十一歳まで寿命を延ばされてしもた。死ぬはずだったのに死ねんようになった』と言うと餅屋が『それはたいした話で、助かったとならば百貫ぐらいかまわない』とこらえてくれた。家に帰ると葬式ごしらえをしていた親が大いに喜びました、という話。

こういう運命に対する感じとり方なんか(笑い)非常に日本的な味があると思います。何かこうえらく頑張ってみせたけれども、行ってしまったら、もう葬式だと思ってるし、それから息子の方は娘に餅を食うだけ食わすというようなところ、何かあるものをそのまま受けとめているようなところ、運命をまるっきり享受して、まあ餅食うなら食えというふうになってくると、また運命の方が道を開いてくれるのですねえ。六十一歳まで延ばしてくれる。これは非常に日本的な話だと思います。こういうふうに運命がありながら、何かのことで変わっていく話も、昔話のお得意の話です。こういう話を聞いてすぐ思うのは、われわれはカウンセラーとして運命を変えることはできないけれども、何とかして弱めることぐらいしてあげたいという事です。実際そう思っています。

人間でない知恵

ここで話を「いばら姫」の方にもどしますと、「のろいをとりのける事はできないけれども弱める事ができるという仙女があって、お姫様は死ぬのじゃなくて百年間眠るのだ」と言います。この死ぬということと眠りということは、非常に親近感があるものですね。ギリシャ神話でも眠りの神ヒュプースは、死の神

タナトスと兄弟です。あるいは死のことを永眠といいますね。「目ざめない眠りについた」という言い方もします。そういう考え方をするとわれわれが眠るということは、生きかえる死を経験しているのかもわかりません。毎日毎日、死ぬと思うとこれ非常に楽しくなります。というのは、「明日私はどう生まれかわろうか」ということになるわけですから。そう思って一晩死ぬという事は楽しいことです。そうして死んだ間にわれわれは地下の世界へ行って地下の世界をみる、それが夢だと思います。

ところで王様は「国中のつむを残らず焼いてしまえ」とおふれを出しました。これが人間の知恵で、こういうふうな人間の知恵というのは絶対運命に対して力を持ちません。人間として、できるだけの事はしても、そういうことというのは運命の力を変えることはできません。たとえば学校恐怖症の子です。学校恐怖症の子が学校へ行かない。そうするとこの子を学校へ行かすためにといろんな事を考えますね。友だちが誘いに行ったらどうだろうとか、タクシーに乗せて連れて行ったらどうだろうとかいうのは、人間として全部考えられますけれども、全部失敗に終ります。だからそんな人間の知恵でない知恵を使わないと学校恐怖症の子は学校へ行かないのです。

人間ではない知恵とはどんなことですか。その学校恐怖症の子にぼくらが会って「行ってもいいし、行かんでもいいよ」と言うんです。行かそうとしなくするわけです。そしたら、その子は行くようになるのです。だからその辺は非常におもしろいです。しかしここではもちろん王様も人間ですから最も人間的な考え方で「つむを残らず焼いてしまえ」と言います。これも親として当り前のことです。だから学校恐怖症の子に親が「行け」と言って説教したり、「タクシーに乗れ」と言ったとしてもそれは親として当り前のことです。しかし親として最善の力を尽くそうと、子どもは悪くなる時は悪くなります。そこまで運命が結晶してくれば。だから結晶する前から頑張っていれば別ですが、ある点までいってしまったらもうなかなか変わるものではありません。

ところで、この姫はだんだんと成長して「本当に素晴らしい女の子になって、一目見た人は誰でも好きにならずにはいられなかった」と書いてあります。それほど素晴らしい人というのは影がなさすぎるのです。誰からも好かれる人にろくな人はいません。(笑い)本当にたいしたことをしようと思ったら、ちょっとぐらいきらわれないと。たくさんきらわれると困りますが。やはり十二人いたら一人きらわれるぐらいだと丁度いい。十二人の人にすべて好かれるということは、キリストにもできなか

ったわけですから。われわれが本当に自分の人生を生きるということは、一目見た人は誰も好きになるというふうにはなれないのじゃないかと思うのです。そういう人は十五歳で死ぬよりしょうがないのではないでしょうか。

十五歳

ところで、十五歳になった時に王様とおきさき様は留守にします。これ残念ですね。ものすごく大事な時こそいてほしいのにと思うでしょう。ところが世の中というものは、本当にそうなるのです。この十五年間必死になって、つむは全部燃やせというほど頑張った王様とおきさきは「あんまり気疲れだから一辺二人で旅行に行こうかしら」ということで行くことになってしまう。人間というのは実際そうなのです。努力をしすぎると、どこか肝心の時に抜けてしまうのです。

そこでお姫様は「一人ぼっちで留守番をしていました」つまり前にも強調したように、孤独な状態になります。人間が孤独になった時には非常におもしろいことが起こります。ここでまた、全然違う言い方をしますと、十五歳の少女にして初めて孤独を知るのだともいえます。これを象徴的に考えると、別にお父さんとお母さんがどこかへ旅行に行ったなどといわなくても、一緒におったとしても、姫は孤独を感じたのだと考えてもよいでしょう。孤独になった時、つまりわれわれがとうとう自分の無意識の世界と対決する時がくるわけです。それまではお父さんの言うままに、お母さんの言うままに生きてきたのですけれども、とうとう心の中の何かと対決しなければならない年がやってきます。それが十五という年です。みんな自分のことを振り返ってみてどうですか？　十二歳ぐらいでしたか？　これは人によって少し違います。早く訪れる人と、遅く訪れる人があります。そして別に早い人が偉くて、遅い人が悪いということは決してありません。これは非常に不思議な事です。しかし、あまりずれたのは困ります。第一反抗期を大学になってから迎えたなどという人は非常に困ります。あるいは第二反抗期を四十歳になって迎えた人とか、こういう人は困りますけれども、少しのずれというのはあまりたいした事はありません。しかし平均的に言うと十五歳ということになるでしょう。

一人ぼっちで留守番をしていますと、やはり何かしたくなりますね。みんなだってそうじゃないですか。家で一人で留守番させられたら開けてはいけないような引出しをちょっと開けてみたり。そしてお父さんの恋文が出てきて、なるほどこんなものかと思って、そこでみんなは大人になっていくわけです。だ

からこのお姫様も一人ぼっちになったので、お城の中を歩き回ります。そしておしまいに古い塔のところへ来て、この塔の幅の狭い段をぐるぐる登って上の方まで行きます。この塔の中におばあさんがいるわけですね。麻を紡いでいるおばあさん。これは十五歳ぐらいになって体験する事というのが非常に良く表わされていると思います。今までは両親の言う通り女の子として生きてきたけれど、このへんでお父さんからちょっと離れ、お母さんからちょっと離れて何か探検をしたくなる。みんなもそのころ少し探検したのではないかと思います。そのころしてない人は今ごろやっていると思います。そうして探検をすると必ず恐いやつがいます。ここでは、つむを持ったおばあさんがいて一生懸命に麻を紡いでいた。このおばあさんは悪の化身であり、運命の女神でもあり、そして狂言回しです。これがおるおかげで娘は成長していくのです。あるいは、これがあるおかげで娘は危険にあうのです。しかし危険にあわずに成長するなんてことは、本当に考えられないことです。

娘の好奇心

そしてここでも娘の好奇心というテーマがちゃんと入っています。娘の好奇心といっても、先日話したようにトルーデばあさんのところへ行った娘はあっさりとやられるわけですが、いばら姫はどうでしょう。「今日はおばあちゃん、何してるの」とか言っているうちに「おもしろそうだからやってみようか」。これ絶対好奇心ですね。しなくてもよい事をするとパーンとはねて倒れてしまいます。ここでこの姫は倒れるけれども、死にはしなくて百年の眠りにつきます。ところが、あのトルーデばあさんのところへ行った娘は、丸木に変えられて、くべられて、終りなんです。この両者の違いはどこにあるかというと、いばら姫の場合は必死になって守ってくれる両親の保護のもとに行なわれているわけです。ここにパラドックスがあって、親に守られているという事は非常にいい事なのです。親に守られていながら冒険する。守られている者こそ、一番良い時に冒険する事ができるのです。下手な人ほど冒険する力がないのに、ふらふら出ていってトルーデばあさんに会うとか、あるいは大久保清に会うとか、そういうことになるのです。さて、いばら姫の場合、娘の好奇心はある意味では失敗でしたけれども、むしろこれぐらいの失敗はどうしても必要なのだとも言えます。

そこでこの姫がつきさされる。ここで姫をついた、つむのひと突きというのは何かという問題が生じてきます。これもいろいろ考えられますけれど、内的な意味と外的な意味と両方ある

と思います。われわれの世界の、われわれの経験は内界と外界とでものすごくきれいに呼応しているものです。だから今の場合でも、この姫をひと突き突いたというのは外的に言いますと、何か男性におびやかされたような経験といえます。十五歳ごろになって初めて男の人にからかわれたとか、あるいは十五歳になって初めて男の人が好きになりかかったとか、かばんを開けたら男の子からの手紙が入っていて驚いたとかいうことです。実際、みんなそういう経験があったと思います。中学校の二年生ごろに何とも思っていなかったのに、かばんから手紙が出てきた時の気持ちは何ともいえませんね。「まあ、いやらしい」というのと「まあ、うれしい」というのと、ウワーッと入り交ってね。ぼくは想像するだけでわかりませんし、間違ってたら訂正してください。この時「これは、お母さんには見せられない」と思って見せない人があるのですね。それから見せる人もあります。そういうふうに、これだけはなぜか知らないけれどお母さんに見せられないという人はどうなんですか？　そこで初めて秘密ということを持つわけです。この〝秘密〟を持つということは大人に至る第一段階ですね。今日は秘密についての考察はしませんけれども、考えてみるとおもしろいです。この「秘密の現象学」という本当にする価値のあることです。

アニムス

さて、ひと突きされたという事は、今言ったように考えてもよいしあるいは、もっと生理的に考えるならば、ここで初めてメーンストレーションを体験したという考え方をしてもよいかもしれません。「娘になった」という体験です。そういう体験をしたと考えられます。あるいは、もっと心理的に考えれば、今までしばしば言っているようにすべての女性の心の奥深く住んでいる男性性、それが心の表層にパッと表われてきたといっていいかもしれません。つまりこれは内的な体験です。それをユングは「アニムス」とよんでいます。すべての女性の心にはアニムスというのが存在する。女性の心の中の男性がアニムスです。つまり内界でのアニムスの動きと外界からの男性の働きかけが呼応するのです。すべての女の人はなぜか知りませんが今の社会では一応、いわゆる女らしく生きることを要請されています。たとえば女の人であればおしとやかにしなければならないとか。

さっきの贈物をみても第一の仙女はお姫さまに腕っぷしの力強さを与えました（笑い）とか、二番目の仙女は数学の才能を与えました。そんなの書いてないでしょ。みんないわゆる、女

とはこういうものだと思われているものを一応与えられています。だから十二人の仙女がいろんな事を与えているのに、力が強いことはすばらしい、数学が解けることもすばらしい、野球でホームランを打つのもすばらしいと思いますが、そういうことを誰も与えていないということは、人間の心の可能性がものすごくたくさんある中で、女であるならばこの十二条をお守りください、あとは結構ですというわけでそれ以外はもらっていない。もらってなくても心の中に可能性としてはあるはずです。

そうすると、そのような男性的な可能性が、今までは心の奥に潜んでいたが、それがパーンと出てきたわけです。つまりそれは、女は女らしくしなさいという事を絶対的に信じている人があれば、その人からみれば悪です。たとえば、女というものはしとやかにして何を言われてもハイハイと言わねばならないともし思っている人がいたら、女の人が意見を言うだけで悪だと思うことでしょう。このごろはあまりそういう人はなくなりましたけれど。今でもおばあちゃんだったらそう思ってるかわかりません。「女のくせにそんな意見を言ったりして、もっと静かにしなさい」とか「女の人が足でふすまを開けるのではありません」とか言われるけれども、みんなはレディだからこのあたりはどうか……（笑い）それはその人の人生観です。ところが実際に、こういう指導原理はものすごく、今変わりつつあります。確かに女とは何かという問題は変わりつつありますけれども、この「ねむり姫」の時代であれば女性としての十二条というのは非常に明白だったわけです。ところが、そういっても女性の中に男性的な可能性がでてきます。「どうして私が男と同じように勉強していけないのだろう」とか、「なぜ私が自分の意見を言っていけないのだろう」とか、「私がどうして自分の人生を生きるために家を飛び出して悪いことがあろうか」これ、みんな悪くないのです。男がやる場合には。ところが「なぜ女ではいけないのか」とみんな思うはずです。

このように現在という時代は、すべての女性がこのアニムスの問題に対決しつつあるのではないかと私は思います。けれども、このアニムスの問題とほとんど対決しないで生きている女の人もいます。みんなそう思いませんか。みなさんの高校の同級生なんかにいるでしょう。ちゃんと就職してニコニコして、お花を習ったりお茶を習っている人いますね。けっこうしとやかで、お化粧をきれいにして、スイスイと結婚して子どもができて、みんないいことばかり。そういう段階を登っていく人は、このアニムスさんとおつきあいをやめた人です。何しろアニムスさんのおつきあいというのは大変な事になりますから。これ

はもう命取りです。だから、おつきあいをやめて生きている女性がいるわけです。ところが、みんなが大学へ来ていること自体、アニムスとのつき合いを始めていることを示しています。そして、十五歳ごろにこのようなことに気づき出す人も多いと思います。

いばら姫の眠り

ところで、十五歳でこの王女が眠りにつくとはどういうことでしょうか。しばらくの間女性性は眠りにつき、「いばら」で自分の城を守るということだと思います。つまり、適切な男性が現われるまで待つことになるわけです。これは本当にうまくできていると思います。ここで守られて眠りにつき、よいタイミングがきたときに、男性が来るまで待つのですから。ところで、非常に気の毒な人は、ここで、本当にやられてしまう人もあるわけです。

そんな人の例を、私はすぐ思い出します。われわれカウンセラーはそういう人たちに会うことが多いからです。たとえば、売春をしたり盗みをしたりして日本中をふらつき歩いているような若い女の人がありました。ところがその女性と話合ってみると、気の毒な経験があることがわかりました。すなわち、十二歳のときに病院に入院中のお母さんを夜中に見舞いに行こうとした。夜おそく一人で道を歩いていると、「自動車に乗せてあげよう」という男性が来ました。その女の子はその車に疑わずに乗ったために強姦されてしまいます。十二歳のときのことです。これは眠り姫が十五歳のときに、つむに刺されて眠るのとはずいぶん違う話ですね。こんな話をきくと、この人がこの後転落していくのも無理はないと思わされます。しかし、十二歳でこんなことがあるというのは、いかに両親の守りが薄かったかということにもなると思います。事実、この娘さんは、お父さんが酒を飲んで無茶苦茶言うので遅くなって、夜中に急に母親を見舞いにいく気になったのです。こんな悲しい気持ちになっている時は、悪い誘いに対しても無防備になっていることが多いものです。

ところで、眠り姫の場合は、両親が一生懸命に守ったが、ただひとつの盲点があり、そのために娘はつむに刺される。しかし考えてみると、このことのためにまた娘の精神の発達が生じるとも考えられます。つまり、守ることは必要だが、どこかで守りが薄いためにかえって発展が生じるというパラドックスが示されています。

ところで、ここでペローの話の方を見ますと面白いことが書

いてあります。つまり、ペローの方では、眠り姫がつむに刺されたとき、王様が例の親切な仙女に頼んで、すべてのものを姫と共に眠らせるようにし、その後で、王様とおきさき様は、眠ったままの王女にお別れのキスをして、お城から出て行かれましたと書いてあります。王女の百年後の幸福を祈りながら、王様とおきさき様は、去って行くのです。こんなところに、王の役割、あるいは両親の役割がよく表われているように思います。ある時点までは、両親は娘の守りであり得ますが、あるところからは、守りは「いばら」にまかせて、両親は立ち去っていく方がいいのです。グリムの方では、両親も共に眠ることになっていますが、私はペローの話の方が、この点うまくできているように思います。

ここで、守りとなったいばらについて考えてみますと、これは美しい花と痛いトゲを持っていることが特徴的ですね。これはゲーテの詩にもありますように、少女の美しさと守りのきびしさを示すものとして、真に適切なイメージを提供するものと思います。グリムの方の話によりますと、このいばらの城にはいろうとして多くの王子たちが挑戦し、なかにはいばらにとらえられて抜け出ることができず、いたましい最後をとげるものもあったそうです。確かに、ある「時」がくるまでは、このような娘には近よらない方が賢明なようです。近よれば、けがをさせられるばかりかもしれません。

何によらず「時」が来るまで待つということは大切なことです。これもわれわれカウンセラーは常に経験することです。一生懸命にいろいろなことをしても何も変わらなかったのに、時が来るとひとりで変わる人というのがあるのです。そんな時は、何かしようとして努力すると、いばらにひっかかれてけがをするだけで、ともかく何もせずに時のたつのを待つことが最良の方法なのです。

ところで、百年の時がたって、王女にふさわしい王子が城にはいっていくと、いばらも自然に道をひらいて、王子さまを通しました。その王子と王女が会う場面を、ペローの物語は見事に描いています。

「王女さまは目をさましました。そして、はじめてあったひととは考えられないようなやさしい目で王子さまをみつめながら、いいました。『あなたでしたの？　王子さま、ずいぶんお待ちいたしましたわ』……」

どうです素晴らしいでしょう。初対面の人に対して、全く確信をもってこんなことがいえるとは、『あなたでしたの王子さま、ずいぶんお待ちいたしましたわ』、こういう時の姫は、まるで前

前からこの王子と結婚することがわかっていたかのようないい方をしています。これは、百年の間眠っていた姫でこそ、こんなに確信をもっていえるのかもしれません。百年の眠りの間に、この乙女の心は一人の素晴らしい男性を受けいれる準備をしてきたのだと考えられます。それだけの準備と、それだけの長い間を待つ力のある人だけが、一目見た男性に対して確信をもって、「あなたでしたの……」と言えるのではないでしょうか。単なる人間の知恵を超えた判断が働くのだと思います。

それにしても、最後の結婚の結末は少しあっけない感じもします。やはり結婚に至るまでには、何かの課題をやり遂げることが必要な気もしますが、これはやはり、乙女の百年の眠りということに重点をおいたお話ですから、結婚のところは簡単になっているのでしょう。前にもいいましたが、おとぎ話には、それぞれ強調点があって、人間の心の動きのすべてをひとつの物語の中にいれこむことはむずかしいと思います。

もっとも、ペローの物語は結婚のところで終りにならず、二人はまだまだ苦労を重ねます。何しろ、この王子のお母さんが人食いだったというので大変なことになりますが、今日は、この続きの解釈は省略することにします。始めにいいましたように、おそらく、別の話が一緒にくっついてできたのではないかと思いますが……。

ところで、これで眠りの森の王女のお話も終りですが、ペローは、すべての物語に何らかの教訓を付けています。それをちょっと紹介しますと、

「お金持で、姿がよく、親切でやさしいおむこさんをもらうには、しばらく待つというのは、ごくあたりまえのことです。でも、百年も、眠ったきりで待つというのは――そんなに長い間静かに眠っているような娘は、いまではどこにもいないでしょう」とあります。

私は私なりにいろいろなことを話しましたが、皆さんはどんなことを考えましたか。それぞれで考えてみてください。

（おわり）

注

幼児の教育　六十九巻　五、六、七、八月号

「サンドプレイテクニック（箱庭療法）」

――秋山達子　参照

子どもの生きがい

西本美節

真実こそわが友

これは、わたしの好きな言葉である。人はそれぞれこの世に生を受け、各人各様の人生を歩む。わたしの産んだ子どもでも、母体を離れるとともに、わたしのものではなくなる。彼は彼の天命のもとに、彼女は彼女の道を歩み始める。わたしが幼児教育に関心を持ち始めたのは、確か小学校五年生の時であった。が、それ以来、おとなになることを極度に恐れた。「子どもの心だけが真実を語る」ような気がしたからである。おとなになれば、心にもないことを言ったり、したりしなければならないだろう。それは、わたしにはとても耐えられそうもないと思った。しかし、いつまでも子どものままでいるわけにはいかない。幼児教育の道にはいって、早くも二十四年の年月が過ぎた。幸いに三人の子どもを与えられたが、今ではみんな青年期にはいっている。わたしは、子どもたちに特別何を期待しているわけでもない。大学で家庭教育の講義をしているが、子どもたちには、型にはまった人間を求めようとはしなかった。豆腐は四角でなくてもよい。丸くても三角でも、味わいがあれば、形は問題でない。わたしが絶えず真実を求めてさえおれば、子どもたちも、それぞれ異なった型であっても、真実を追求する人間に育ってくれるのではなかろうか。ひとりにただ一つしか与えられないかけがえのない命と、やり直しがきかない人生を大切にし、仕事に生きがいを感じてくれるならば、しあわせだと思っている。

大きかった長男

九十歳の曽祖母や祖父母・叔母が待つわが家へ、両親に抱かれて第一歩を踏み入れた。生下時体重三八五〇グラム、骨太、色白で、髪の毛のつややかな子である。わたしの体格のわりに大きな子で、三日間も陣痛に悩まされた。「眞理に生きよ」との願いをこめて、「眞」と命名した。おとなばかり六人の中で、みんなの愛情を一身に受けて育つ。「健康」という言葉は、この子のためにあるのではないかと思うほど、よく眠り、よく食べた。よく笑い、大声で泣き、満足するとケロリと泣きやむ。育児書にあるとおりに、すくすく成長した。

わたしが掃除している間は、じっと水そうの中の熱帯魚に見入る。ベッドに入れると、セルロイド製のくす玉の飾り糸を引っぱって、ゆれるたびに、キャッキャッと笑う。何もない時は、自分の手を明りに透かして指を動かしたり、足指をつかんだりして遊ぶ。人が近づけば、全身をバタつかせ、手を差し伸べる。泣いて抱かれようとはしない。泣く時は、泣くことに集中している。顔じゅう口にして目をつぶり、まっかになって泣くので、こちらのほうが手を出しにくい。十分くらい泣き叫んで気がすむと、〝アア、アア〟と自分の声を自分の耳で聞きながら、だんだん声の遊びにはいってしまう。添い寝をしようとすると、むずかって寝ない。ベッドに入れると腹ばいになり、すぐにスヤスヤと寝息をたてる。

一ヵ月もしないうちに「この子は、わたしとは別のひとりの人間なのだ」と思い知らされた。六ヵ月でつかまり立ちを覚えた。四日四晩、目が覚めている間じゅう立ちっぱなしである。わたしは付き合いかねて、寝てしまう。それでも本人は平気なもの。八ヵ月目には、二メートル四方のベビーサークルを引きずって自分の目的を達し、十ヵ月目にはサークルの棒を引き抜いて、囲いの外へ出て来るようになった。そこで、あぶない物を持って、わたしのほうがサークル入りをすることにした。また、たんすの引き出しを階段にして登り、上の物を取る。引き出しの金具に二尺ざしを通し、ひもで結んであかないようにすれば、縁側からいすを運んでくる。大きなたらいを頭からかぶって歩き回る。毎日、母と子の知恵比べである。はさみや、のこぎり、やかんなどを持って危険ないたずらをするときは、きまってそれをたたきながら持って歩く。愚かなわたしは大助かりである。ミシンを踏んでいるときは、けっして手を出さない。動く車や針を食い入るように見つめる。ミシンが止まると、手を出し、動かしてためす。置き時計はたちまち分解されてしま

う。そして〝アーア〟〝ドウゾ〟と持って来るのだから、しかるわけにはいかない。床の間の置き物のコイや鳥は、いつも同じ場所にいたことがない。しかし、台を傷つけたり、こわしたりするわけではないから、しかれない。祖父は〝このコイは生きてるな〟と眞を見て言う。〝ウン〟こっくりとうなずく。

十ヵ月には歩き出し、寒中でも帽子だけかぶって、素っ裸になって日光浴をする。せっかんされていると誤解した近所のおばさんは〝何を悪いことしたのだろうね。かわいそうに〟とむすこに同情する。本人は日だまりにいて、汗ばんでいる。犬小屋へはいり込み、犬を追い出す。小屋の中を金づちでたたく。大工さんごっこだ。左手がきく。おもちゃは左手で持ったり並べたりする。スプーンやフォークは、右のほうへ置くと右手を使う。力がいるときは、左手を使うようだ。育児とはこんなにおもしろいものなのかと思う毎日であった。からだが大きくなりすぎたが、止めようがない。満一年で三歳の大きさである。薄味であれば、なんでも食べた。三歳のある日、この子を連れてバスから降りようとした。〝うそつかんと、この子のバス代払いなさい〟と車掌にしかられた。〝まだ三歳だ〟と言っても、六歳児の体格をしているのだから、疑われるのも無理からぬことだ。〝ボク、三ッチュヨ、コイダケ〟と指を出されては、しかたないから降ろしてくれた。それでも、疑い深いまなざしで〝今度から払ってくださいよ〟と言われた。これからは戸籍抄本でも持ち歩かねばと思いつつ、生年月日入りの「迷い子札」を作らせることにした。

小さかった次男

五年間待って、やっと生まれた次男。片方の手のひらに乗る、子ネコほどの未熟児である。七ヵ月の早産児、生下時体重一二五〇グラム。〝せめて一五〇〇グラムあればね……〟という医師の診断である。両方の指はマッチ棒を並べたようで、耳は桜紙を付けたようであった。夫はそのころ、ちょうど未熟児の研究のさいちゅうであった。未熟児の不幸については、いやというほど見せられていた。生後一週間以内で八五パーセント死亡、残りの一五パーセントも一年以内に……。能力の発達については見込みがない。「欲は言わない。せめて命だけでも、一日でも長く」と祈るよりほか、なすすべはなかった。

三つ子が育つほどたくさん出る母乳を絞る。絞りきれず乳がたまる。乳腺炎を起こしたら、この子は育たない。どうしても母乳で育てようと、一日じゅう絞り続ける。一回に飲む量は五CC－一〇CC、それも細いカテーテルを通して、注射器で二、

三十分もかけて胃へ送り込む強制栄養である。一日に十三回。保育器の中の子が、日に日に小さくなる。一週間目に〝チアノーゼです。お父さんを呼ばれたら〟と医師から言われ、夫に電話をするが声にならない。覚悟はしていたが、思い切れない。まっ白なシーツの上の子は、全身土色をしている。肺炎併発。大きくふくらんだおなかだけが、かすかに動いている。「生きていてちょうだい。生きててよ」と祈るうち数時間がたった。土色が消えうせてはだ色になる。一命が助かった。〝強いぞ坊や〟ずっと付き添ってこられた若い医師の髪にはあぶら気もなく、無精ひげが見える。美しい婦長さんの目もくぼみ、くまができている。申しわけない。ありがたいことだ。望みをもって育てよう。どんな困難があっても、希望をもって歩むように、「望」と名付けた。わが家のホープ君、だれからも愛されるノンちゃんである。

やがて、わたしだけ退院する。そして、一日中乳を絞り続ける。それから毎日、家から病院まで往復一時間の道を、日に四回も五回も、絞った乳を魔法びんに入れて運ぶ。祖母・祖父も、父も、幼い五歳の兄も、交替で運ぶ。〝ノンちゃんのお家のかたには負けてしまいますわ。お家のかたを見ていると、ノンちゃんのために徹夜しても育てなければ……〟と婦長さんは言ってくださる。

退院後三週間めから、わたしは毎日病院へ通う。二時間おきの授乳のために。生後三ヵ月が過ぎた。初めてこの手に抱く子、グニャグニャと柔らかく軽い。その口に乳ぶさを当てがう。乳がほとばしり、口からあふれる。ゴクリと飲み込む。涙がほおを伝って流れる。一〇グラム飲んだ。上できだ。

いよいよ退院に決まる。〝今、正直に申しましょう。坊っちゃんは心臓が悪いようです。育てられても三年か、長くて六年間でしょう。それ以上は、からだの大きさに心臓が耐えられなくなるから無理です〟と、気の毒そうに言う医師の言葉に、たとえ一年でも半年でもいい、一緒に暮らすことができれば、こんなしあわせはない。もし六年間も育てられれば、もったいないくらいだとさえ思った。乳を飲むたびに、ゼーゼーと心臓をならし、噴水のように乳を吐く毎日が続いた。それでも、わたしは生きていることに満足した。からだの調子が落ち着いたときは、ボツボツ知恵づきがみえる。日光浴をすれば、足をバタつかせて、声をたてて笑う。大きなおでこが父親そっくり。ときどき、ひょうきんな表情をして、皆を笑わせる。吐くくせによく食べ、ゼーゼー心臓をいわせては、どんぶり鉢に吐き出し、また食べ直す。全部食べ終わると、いたずらを始める。サーク

ルにあるカギのネジくぎを、つめで廻して抜く。はい出しては、引き出しの中味を全部引っ張り出して散らかす。畳のみぞに指を突っ込んで、ゴミを口へ入れる。マンマもブーブーも言わぬ先に、第一声が〝ケテー〟（戸をあけての意）と呼ぶ。〝チョーダイ〟必要な言葉しか言わない。一年三ヵ月には歩き始めたが、自分の足の影を踏もうとして、なんどもひっくりかえる。影を取ろうとして、床をガリガリひっかく。

少しむし暑いつゆのある日、二、三日吐くことも少なくなり、きげんがよいので、生まれて初めて髪にはさみを当てた。しまった。しかし、すでに遅い。ぜん息の発作が始まった。ごめんね、望君。カールした薄い髪の毛など伸びていてもよかったのに、ついうっかり切ってしまった。薬も受けつけない。口からあわまで出して、苦しそうだ。それから三日間、乳も飲めない。〝エフェドリンは赤ちゃんには使わないのですがね。しかたないから少し使いましょう〟注射でようやく乳だけ飲めるようになった。また母乳だけの生活に舞いもどった。

ひとり娘

出産予定日が過ぎた。ああよかった。これで普通の子が生まれると喜んだ。しかし、予定日を二週間も過ぎた。病室があわただしい。きょうもまだかしら、早くしないと年末になり、大へんなのに。ところが、たいへんなことになった。妊娠中毒症、高血圧（二六〇）、心音停止。注射を打たれた。〝手術です〟どうしてかしらと思う間もなく、意識を失った。〝お母さんだけはなんとか努力して助けましょう。赤ちゃんはわかりません。覚悟してください〟そう告げられた夫はどんな気持ちだったろうか。帝王切開、臍帯てん絡、仮死で生まれた。思いがけない経験だ。初対面の娘は、こけしのようなまん丸い顔に、深いえくぼを作って、あいきょうを振りまく。まだ目が見えないのに見えるような顔つきで、人びとの心を満たしてくれる。心の美しい娘になって、多くの人びとの心を満たしてちょうだい。美しさに満ちあふれた娘に育つよう願い、「満美」と名付けた。いずれマミー（母）になるのだから。貧血がひどいので、増血剤を飲ます。薬で口の中がしぶかったのか、指を二本も吸い出した。人形を持たせても、遊んでいても、絶えず二本の指は口の中である。指先は白くふやけて、湯気がたつ。気づかれないように、用事をさせたりしたが、いっこうにきめがない。自分で気がつくまで、心にわだかまりが残らぬよう、気にしないことにした。

だれからも一度で名まえを覚えられ、好かれた。人なつっこ

い目でニッコリ笑う。いつもきげんのよい娘である。六ヵ月め、長兄の誕生日に、いすに腰掛け、家族の仲間入りをさせた。カルピスをみんなに配っていたときである。突然彼女は立ち上がり、〝アミ（マミ）モー〟と主張したのである。ウックン、ブルブルブルしか言わなかった娘の、初めての言葉に、一同あっけに取られてしまった。それ以来「主張女史」と呼ばれた。

やりたいことは好きなようにやる。歩けるようになると、大きなバケツの水を指ですくってなめる。しかろうとすると、例のえくぼをつくって、ニッコリとし、出ばなをくじかれてしまう。長兄の絵の具を食べて、口じゅう緑色にしてニッコリ。口紅で顔じゅうに描き、鏡を見て〝コワイ〟と泣き出す。掃き寄せたごみを、ちり取りを取りに行っているちょっとの間に、ほうきで散らかし、〝ジョウズデチョ。オテチュダイ、チタノヨ〟と。ごみを移動させるのがそうじだと思っているのだから、しまつが悪い。〝ごみはね、こうして寄せて、ポイと捨てるのよ〟〝ゴミ、ポイネ。オチョージ、ママ、ジョーズネ〟恐れ入る。しかる元気もなく〝あーあ〟とため息をついたら〝ママ、タイヘンデチュネ〟とくる。この小悪魔めと、にらめつけたら、〝ママ、ツキ（好き）ヨ〟とくる。〝ママ、ホーキカタヅケテアゲル〟ほうきを持ってさっさと走って行った。

〝ぼくうれしいナ〟

幼稚園から帰った眞とわたしの話（年中組のとき）。〝オ母サン、ボク、ウレシイナ〟〝何が〟〝今度クリスマスニネ、オ日サマニナルヨ〟〝よかったね、どうしてそれがうれしいの〟〝何モ言ワナクテイイシネ、オテテ上ゲテ、キラキラサセレバイイモノ。楽隊ノ指揮モスルヨ。オ客サン見ナクテイイデショ。ウシロ向イテルカラ〟劇のせりふを言わなくてよいし、器楽合奏のとき後ろ向きでよいから安心だというのである。

大きなずう体に以合わず気が小さい。やはり「カエルの子はカエル」だ。照れ屋の夫と、内気なわたしの子だからしかたがないだろう。年長組になった二度目のクリスマスのこと。〝ボク語り手ダヨ〟聖劇の第一場の説明役になった。それは、相当に長い文章だ。担任の先生から〝クラスで、眞君が一番字を読めないですよ。十三字だけです〟と言われた。姓名を表わす七字のほか、六字だけである。しかし、文字の学習は、小学校にはいってからでもおそくはないと、わたしたち若夫婦は気にかけなかった。一字一字は読めなくても、通園途中の駅名はわかるし、絵本の文章も暗記している。クリスマスの当日、休んだ友だちの代役として、第三場の語り手もやらしてもらった。器

楽合奏では、大太鼓もまちがわずにたたけた。もう人前でも、はにかまずに表現するようになった。わがままで個性の強い子ではあるが、よい先生に恵まれて、気弱さもなくなり、しあわせな幼稚園生活を送った。

〝幼稚園行ったれへん（行ってやらない）〟

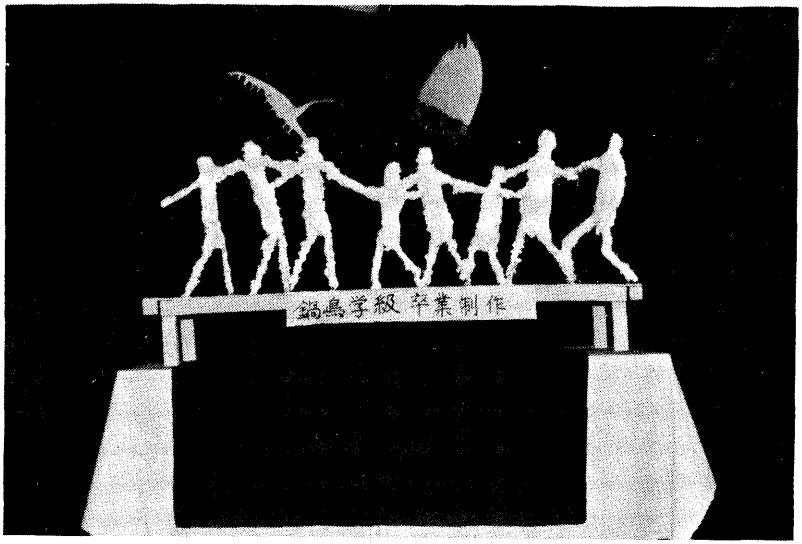
寿命の短い子ならなおさら、少しでも早く友だち仲間の楽しい生活をさせてやろうと、望は、家の近くにある幼稚園の三年保育に入れた。ある日、突然〝ボク、アスカラ幼稚園行ッタレヘン〟と、プンプンおこっている。〝どうして〟〝先生オコッタラアカン言ウトイテ、自分オコルモン。センセ、マチゴートルカライヤヤ〟どろんこ遊びをしかられた不満である。〝ノンちゃん、悪いこととして、しかられるのは当り前よ〟〝ソンデモ、オコランカテエエヤ、話シテクレタラ、ボクヨウワカルンヤカラ〟どうしても、行くのはいやだと言い張る。気が強いというか、いったん言い出したらあとへ引かない。翌朝、わたしが先生に話すことで、やっと出かけた。先生も、強くしかるつもりではなかったが、約束を破ったことを話され、望も話してくれるならと、再び幼稚園へ行き出した。しからぬ教育はできるものだ。

〝ママ、どうして涙が出るの〟

満美がかわいがっていた子ネコが死んだ朝のことである。〝ママ、ドウシテ涙ガ出ルンデショ。マミノ目カラ止マラナイノヨ〟と、じっと目をすえて、涙をこらえている幼い娘。〝ルミエール（ネコの名）も、きっと天国へ行くわよ。心配しないでいいのよ〟〝ウンワカッテル。デモ、ルミエール、モウ冷タクナッチャッタ〟食事もせずに、幼稚園へ出かけた。大粒の涙がほおを伝っていた。

長男の眞は、あと数ヵ月ではたちになる。彼は真理を求めて、自ら進むべき道を選んだ。六年間の寿命と宣告された望は、はや十三歳になり、医者を目ざしているし、満美は思春期を迎え、目下宝塚に夢中になっている。かくして、子どもはひとりひとり親元から巣立って行く。

（神戸常盤短期大学）



肢体不自由児教育にたずさわって

鍋島美春

私は肢体不自由児施設の中にある養護学校の分校に勤めております。毎日接する子どもたちはみな身体に障害をもち治療や訓練のために家庭を離れて学園に入園しております。

この子どもたちを見ていると幼少時よりの生活環境や両親の養育態度が子どもの人格面での特徴となって表われている事に気がつきます。そんな事について過去六年の経験から日ごろ考えている事を述べたいと思います。

一

今年の受持ちは小学部三年生で九人ですが、国語・算数については能力別指導をしています。ところが最近普通学校から転校してきたMちゃんとS君の二人が下のグループの子どもを軽蔑するような態度をとる事に気がつきました。学級内には心身とも優勢なY君もいますがそんな態度はありません。Mちゃん、S君のほかは養護学校から転校してきたAちゃんと幼稚部から学園にいる子どもたちです。

S君というのは長男の甚六というか、欲のないおっとりした子で、そのS君がほかの子どもを馬鹿にするのです。それだけに私はこれをMちゃん、S君だけの問題でなく教育界を含む社会全体の問題だと思うのです。子どもたちは勉強々々と詰め込まれ、勉強をしていれば周囲の人からも認められます。そんなふん囲気の中で育つと世の中で大切なものは知識や学力であると考え、反面それがなければ価値がないとして見下げる気持ちになる事は容易に想像できます。Mちゃん、S君は子どもだから正直に態度で表わしましたが教育界全体の風潮を示すもので、社会の大半がそんな価値観で動いているんじゃないでしょうか。

昨年度受持った学級は六年生でした。九名中七名まで脳性まひでかなり重症ですが、知能障害はありません。それなのに一部の子どもを除いては三、四年程度の学力しかないのです。そこで残された能力を充分のばして障害を精神的に克服させたいと考え指導しました。そうした意味では普通の子ども以上に、この子どもたちには基礎学力が必要だと思ったのです。でも残念ながら効果はあがりませんでした。訓練ならともかく学習のための努力はあまり経験がないことであり、その必要さを理解させる事がむずかしかったのです。

障害児をもつほとんどの母親は「この子は体が悪いんだから勉強なんかできなくても」と知的な面での期待を幼少時に捨ててしまいます。子どもを連れて病院を尋ね歩き、治療に訓練に母子ともに励むのです。ある母親は家へ帰りたいと訴える子どもに「どんな事があっても歩けるようになるまでは帰ってきてはいけない」と励ます。一方では障害に対する不びんさから過保護の極端な形をとり、日常生活ではずいぶん無理をしても子どもの要求を聞きいれるのです。こうして子どもたちは心身ともに鍛える機会を与えられないまま成長し、歩ける事、手足のよく動く事を必要以上に重要視することになります。反面それ以外の事に対する関心を失いがちで、児童会の役員などに、人がらやよい意味での知的能力よりも体の動く子どもが選ばれやすいのは、子どもたちの価値観と関係があるように思えます。幼少時よりおかあさんがどんな事で一喜一憂するかをくり返し見ているうちに、子どもの価値観が形成されていくのでしょう。

中学生ともなると自分の機能回復の限界がだいたいわかってきます。しかし、それを認める事はこれまでの価値観から考えると、最悪の場合自分を否定する事にもなりかねません。ちょうど人生について考える時期でもあり、非常に悩む者もでてきます。かって大阪で肢体不自由児が自殺したのもこうした時期でした。

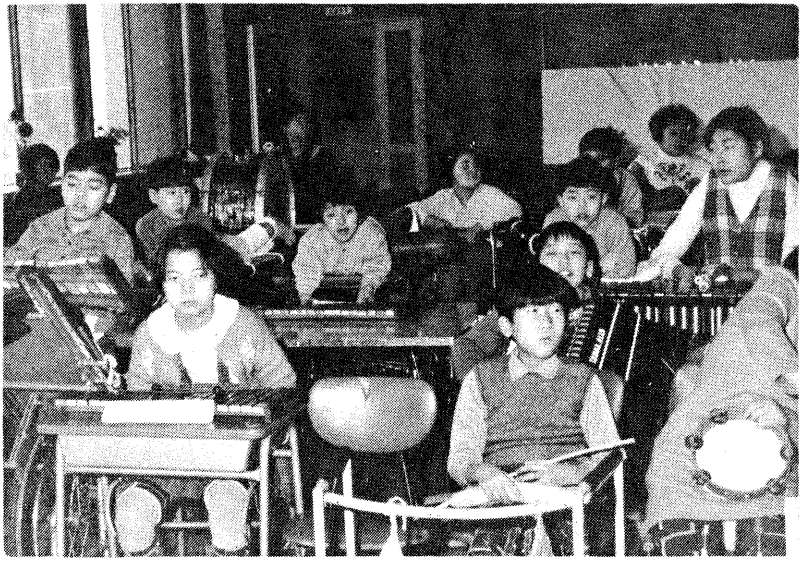
学級の子どもたち

先の普通児の知育偏重と肢体不自由児の身体機能面の偏重はどちらにしてもそれなりの事情があります。でも人間のみを強調しており、人間として本当の価値を忘れている点で同じ誤ちを犯していると言えます。

二

子どもたちの作文や日記を見ると感情の表現が乏しい事に気づきます。普通児にもありますが比較にならないほどひどいのです。日記に、その日あった運動会の事を書いたのは九人中二人でした。普通学校で三年生を受け持っている友だちの学級では、ほとんど全員が書いてくるそうです。二人のうち一人は生き生きとどうしても頑張って勝ちたいという気持ちを書いていますが、他の一人は簡単に、した事を五、六行書いたにすぎません。

また、朝「おはよう」と言ってもすぐには「おはよう」と元気な声が返ってきません。躾(しつけ)なども関係してきますが、肢体不自由児と接していると、その交わりで、心からの感動というか、触れあいを感じる事が少いのです。先に述べましたように、子どもたちは日常生活で人の手をかりる事が多く、特に母親は、子どもの日課のすべてのお膳立てまでしてしまいます。子ども



学芸会風景

はただ受動的に作られたわく内で生活しているにすぎないのです。そうした経験は、ちょうど観光バスの中から眺める景色のようなもので、心に残らないのではないでしょうか。自分からしようと思ってした行動なら、見かけは地味でも、一つ一つの事柄にもっと喜びとか悲しみの感情が動くはずだと思うのです。

昨年、私たちの学園で初めての修学旅行で京都方面へ参りました。幸い現地の親の会で奉仕を申し出てくれましたので、清水寺の舞台へ上る計画を立てたのです。ところが、連絡の手違いから援助を受けられなくなり、中止案も出ました。舞台を目前にして子どもたちのたっての希望で職員と父兄ともども汗びっしょりで、とにかく上まで上りました。舞台の上から紅葉を眺めつつ飲んだ湧水のおいしさは、忘れられないそうです。旅行中第一の難関で、最も人気のあった清水寺でした。広間で存分に暴れた旅館の夜もなかなかの好評でしたが、琵琶湖の見えかくれする比叡山ドライブウェイは、ほんの通り道程度の印象しか残りませんでした。

こんなところから、肢体不自由児教育では子どもたちの自発的な行動と、思いきって心身を使い鍛える機会を多く持つ事が必要であると考えられます。運動会、クリスマスなど楽しく仕組まれた行事が多い割に子どもたちの心に残らないのはこうし

た配慮が足りなかったためだと思います。

次に子どもたちの対人関係です。どれも関連した問題ですが、受身の生活に片寄っているというのは、対等な立場での人間関係がもちにくい事になります。もし、普通児と障害児が腕づくでけんかをすれば、まず叱られるのは普通児の方で、双方の言い分を聞くのはその後になりましょう。でも肢体不自由児は総じてけんかをしません。けんかというのは、お互いにその瞬間には対等で自己を主張するところに成り立つと思うのです。肢体不自由児の場合は、周囲の人から同情され、甘やかされる人間関係であり、対等に扱われる事には本人が堪えられず、自分から避けるように見えます。

この事は心理テストにも表われています。欲求不満場面での子どもの対処の仕方から人格傾向を調べるＰＩＦスタディの結果では、相手に責任があって自分が欲求不満におちいった時にも、率直に相手を攻める事ができず、単に不満を指摘するとか、自分が悪い事にしてしまったり、仕方のない事としてあきらめる傾向があります。また、普通児の場合は、本当に自分が悪いと思った時には後始末までしようとする傾向が強くなります。肢体不自由児の場合は、簡単に謝るのですが、それは言葉だけで、後始末など自分にできる範囲の弁償もしなければならないという気持ちにはなりにくいのです。

こういった傾向も肢体不自由児を取り巻く人間関係の中では許される甘えのようなものでしょうが、社会一般には通用しません。健康な人格形成のためには、障害児に対しても状況に応じて償いまで要求すべきで、そうでないと対等な人間関係とは言えないと思うのです。とかく障害と混同して、物事のけじめをいいかげんにしがちですが、これは母親はじめ私たち教育者の責任で、体の障害以上に子どもの心を損い不幸にするものだと思います。

三

母親は、多くの場合、障害児をもった事でうろたえ何とかしなければと一生懸命なのですが、少し子どもから離れて、自分のしている事がどんな結果をもたらしているか眺める余裕があれば、ずいぶん変わってくると思うのです。子どもを育てる態度に、普通児、障害児の区別はありませんが、障害児の場合は、母子ともに一種の問題場面にありますので、まっすぐのびる木も時には傾き、時には倒れる事もあろうかと思います。木にささえをするように、一本立ちできるまではささえが必要で、その一端を私もになっているつもりでおります。

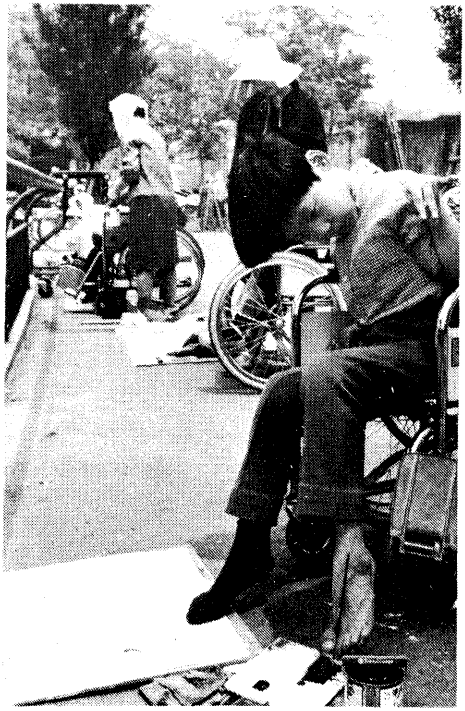
さいごに、非常に重症でありながら、心は強くのびのびと育っている子どもの詩を読んでいただきたく思います。

（大阪府堺養護学校　大手前分校）

一生に一度の願い

岩宮　誠

ぼくは　自分でごはんが食べられない。
だから　ほかの子が　食べていると、
くやしくて　しょうがない。
自分で　食べられたら、
どんなにおいしいだろう。
一度でいいから、
自分の手で　ごはんを
食べてみたい。



岩宮　誠くん

「幼児教育の源流」III
―ペスタロッチ―

二文字理明

教育に携わるすべての人々にとってペスタロッチ（一七四六―一八二七）の名はあまりにも有名である。しかし彼がその生涯にわたって実践し主張し確立した数多くの教育原理について再評価、再認識、批判が常に怠りなく行なわれているだろうか、ペスタロッチは不変である。変わるのは時代であり、われわれである。古典という美名のもとに偶像化し、かえって有名無実化する弊をさけるべきは、ペスタロッチにおいてもその例外ではない。

今日における一般的に流布した異常な教育過熱の中で、幼児教育も一種のブームとさえうけとれるような活況を呈している観がある。幼児学校の設置による「幼保一元化」論と、機能的分化による「幼保並存」論に見られる中央教育審議会と中央児童福祉審議会の対立、[1] 早期才能開発を堂々と唱える能力主義の是非、三歳児、零歳児と早期化する集団保育論議等、幼児教育は大きな時事問題となっている。その解決はもはや部分的断片的考察を許さず、その教育思想にまで立ち至った、根本からの問い直しからのみ期待されているといってよい。このような時点において、ペスタロッチの幼児教育を掘りおこしてみることは全く無意味なことでもあるまいと思われる。

「人類教育の歴史において彼を画期的な存在たらしめたもの、彼を人類の大恩人たらしめたものは、実に初等教育改革家としてのペスタロッチーである」[2] 長田新のこの表現に代表されるように、ペスタロッチの貢献の最大のものは初等教育の改革であったことは周知のことである。けれどもここにおいて今一歩注意すべきは、彼が初等教育にとどまらず幼児教育の改善をも同様の比重をもって重視したことであろう。そのことを彼はグ

リーブスというイギリス人にあてた『幼児教育の書簡』の第一信において次のように述べている。

「われわれの改善・組織が幼児教育の段階にまで延長されない限り、われわれの仕事は半ば成就したものとはみなされるべきではなく、また人類の福祉に対するその結果にも半ばの期待もなされるべきではないことは確かである」(3)

ペスタロッチは人間の一連の自然発達の最初の過程として幼児期をとらえ、豊かな無限の発展性を蔵した可能体として幼児を描いている。十八世紀のスイスという歴史的制約下に改革を試みられた、ペスタロッチの幼児教育を、幼児の発達と訓練という側面からまとめ、更にそこに流れる教育原理を検討し、彼の幼児教育理解の一助としたい。

一、幼児の発達

ペスタロッチは何をもって「発達」とし、また何によって「発達」を促進しようとしたのであろうか。

ところでペスタロッチがその教育活動の理想とするところは、道徳を基調とした知識と技術と道徳との調和的発展である。いいかえれば頭と手と心臓の発展において心臓に優位を認め、それをめぐっての調和的発展を意図していたのである。(4)子どもの中には既に「少なくとも発達の可能性を包含した能力」(5)としての人間諸力が備わっているのであり、調和的発展の基礎は与えられているのである。

幼児の発達の過程において、身体的独立、知的独立、道徳的独立がそれぞれ、幼児のより高次な発達を成しとげていくための基本的道標となっている。

1　身体的独立

身体的な独立は生誕後幼児が手を動かし、手によって事物を認識しようとする「手の努力」(6)によって始まる。「手の努力」は身体的独立の第一歩である。やがて幼児は自分の意志でからだを動かせるようになる。これをペスタロッチは「歩行の開始」として大きな意味を与えている。自分で動けるようになった幼児は、それまでの身体の自由がきかないことによる母との関係を脱し、「自由な自発的な努力」(7)に基づく母子関係をつくりあげることになる。歩行はまた「身体に関するあらゆる能力の十分な使用法を獲得する」(8)という発達段階に至るためにも大きな意味をもっているのである。

2　知的独立

身体的な独立につづいて知的、道徳的独立が感じられ始める。知的独立は「思考の習慣」(9)の形成を意味する。きわめて不完全な形ではあるが幼児の精神のうちに「観察と記憶とから内省への一歩が踏みだされる」(10)この場合その刺激となるのは「詮索好

き」であり、子どもの好奇心から発する発問に対し賢明な答を対応させて、思考の形成をそこなわないように、注意すべきである。「思考力は幼児の心の中に芽ばえ、（中略）やがて多くの点において他人から子どもを知的に独立させる」[11]のである。数、形、語というペスタロッチが要素に還元したところのものは、「思惟を呼びさまし知性を形成することによって、悟性を有効に働かせ、かつさらに将来の研究のためにこれに準備を与えるにふさわしいものとして」[12]知的発達の素材となるのである。語についていえば、たとえば母国語に精通することなくして悟性は道具をもつことがないからである。[13]

3　道徳的独立

「最も重大な歩みは心臓の愛情に対するところのものである」[14]道徳的高貴化は常に教育の第一の課題であった。だからペスタロッチは『ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか』の中で「子どもの最初の教授は決して頭脳の仕事ではなく、決して理性の仕事ではなく、それは常に感覚の仕事であり、それは常に心情（Herzen）の仕事であり、常に母の仕事である」[15]と述べている。心臓の愛情を指導し醇化し向上させることは、「いくら早い時期から始めても早過ぎるということはない」[16]むしろ「児童の教授の最初の時間は児童の誕生の時期である」[17]とさえいっている。

幼児の精神のうちに信仰と愛との積極的な力の存在することを、動物的本能的本性を克服し真に人間へと成長するための道徳的本性の成長の萌芽としてとらえるのである。「子どもは最も崇高的な諸徳の予感をもつている」[18]道徳的独立とは、神を認識し、神との関係の中に見いだすことであり、人間に関して自分で判断し、「人格に関する観念を得ていよいよ道徳的に独立する」[19]ことになるのである。

二　幼児の訓練

1　体操

ペスタロッチにおいて体操は「人間のいっさいの能力は進展されるべきであり、また人間のいっさいの眠れる精力は呼び起こされるべきである」[20]とする、いわゆる全面発達論を根拠としている。練習は容易なものから複雑で面倒なものへと配列されるべきであり、かつそのことが最も明白に証明できる領域である。だから「欠けているようにみえる精神力は、もっぱら実行すること以外の手段によっては決して産み出されるはずがなく、いわば、あるいは少なくとも、決して発展させられるはずがないということを、このように明瞭に示すことのできる技術はおそらくはないであろう」とペスタロッチが言う時、体操のもつ「全面発達」「易から難へ」といった「合自然」の原理は他の教

科の教授方法にも示唆を与えうることを示している。

体操は年齢および体力の強度に応じて工夫させられればあらゆる子どもにふさわしいものであり、病人にも効用をもたらしうるものとなるのである。どのような練習を子どもに課するかは母親にゆだねられており、母親は「児童体操の取扱いについての経験家に相談するよう」[22]すすめられている。体操のよく指導された場合の具体的成果として彼は次のものをあげている。

(一)、身体の強さと器用さ。(二)、道徳教育の二大要素ともいうべき快活と健康。(三)、協同精神と同胞感情。(四)、勤勉の習慣。(五)、公明で率直な性格。(六)、危険をものともせぬ勇気。(七)、苦痛の際における男性的行為。[23]

ペスタロッチの身体的教育に関して注目すべき点は、彼が体操だけに限定せずそこに遊戯（Spiel）をも含めたことである。この点について彼は、

「体操によつて一般に四肢を使用しているうちに強さと器用さとが習得されるであろう。しかしいっさいの感覚を働かすためには特殊な練習が工夫されるべきである」[24]といっている。

「特殊な練習」とは、事物の距離や大きさの割合、色彩の濃淡、音響に対する鋭敏な耳など主として目と耳の発達を目的とする練習のことである。これをペスタロッチは遊戯の中に入れることが望ましいとするのである。「そこでは最大の自由が支配せねばならないし、何事も愉快に行なわれねばならない」[25]このような練習はペスタロッチが「趣味」（Geschmack）と呼ぶ一種の好尚の感覚の養成へと向かう練習と結合されるべきだとしている。それは「よい趣味とよい感情とは相互に密接に関連したものであり、かつそれぞれ互いに強め合うものである」[26]からだ。

2　音楽

音楽の成果としてペスタロッチが期待するのは演奏の技能の熟練ではない。

「精神を最もよい印象に対して準備し、または調節するような点において、わたしがつねに最も有効であると観察してきたのは、感情に及ぼす音楽の顕著で最も有効な影響である」[27]

ここにおいて音楽は、道徳教育にむしろ役立つ教科として重視される。

「音楽の教育上における効果は単に国民的感情を生動させるということだけにとどまるものではない。（中略）あらゆる悪い、あるいは狭い感情と、あらゆる偏狭な、あるいは低級な嗜好と、人道にふさわしくない、あらゆる情緒とを根絶させるものである」[28]

「調和や技巧に富んだ演奏の優雅さ」は第一主義ではなかった。つまり、より高度な演奏技能の習得、芸術性ではなく、子

どもの活動、子どもの心臓にかかわる側面を重視したのである。「単純でたくらみのない歌曲」が最適の題材であったということもそのことと軌を一にしているといえよう。

3　絵画

彼は幼児の能力の最初の表われとして「模倣の欲求と試み」[29]を認め、好奇心から、眼前のものを模写したり、手近な材料で何かを作りあげたりすることに注目した。第一に幼児のそのような最初の試みを容易にする「玩具（シュピールツォイク）を提供し」[30]助けてやることを説いている。幼児がこれによって興味をさらに喚起される時、「器用さ」が促進され、「観察眼」が鋭くなるのである。

右のことが可能となることを前提とする彼は、その次の段階として、「絵画基本練習」を行なうことを提示している。それは「構成部分または要素に分析すること」によって幼児にも容易に行なわれうる。ペスタロッチは絵画の練習を、他の絵を模写する「臨画」よりもむしろ、自然そのものを対象として「自然から写生することを」[31]強調している。今日から見れば当然のことであるが、当時にあっては画期的な絵画教育の進歩というべきであろう。「物象そのものの与える印象は、真似られた外観よりもいっそう強い魅力をもっている」[32]からだ。「光線と陰影」、「遠近法」といった基本的原理も絵画の表現に必要な限りにおいて説明を加え幼児の「器用さ」「忍耐」「努力」が内発的に生ずるのを待つべきで、細部にわたり教えすぎることを禁じている。

さらに任意の材料によって模像をつくる練習が提示される。「少なくとも何事かをなすことのできる喜びは、多くの十分な興奮を伴うものである」[33]として、技術の優秀さはなくともその制作プロセスにおける幼児の感性の昂揚を重んじているのである。

三　処罰

教育における処罰の是非は今日なお緊急の問題である。彼は処罰または体罰の禁止を主張し、子どもを責めるより教師の側を、さらに教授法を責めるべきことを述べている。しかしそれはあくまでも原則である。「体罰は教育上どんなことがあっても許容できない」[34]とはいわない。彼が問題にするのは、「教師または組織が非難されるべき時に子どもらが処罰される原則に反対する」という一点である。

興味のなさ、教授に対する注意力の不足、教授に対する嫌悪等々について教師は子どもを責め、不幸を訴える権利はないのである。早期から、知識の獲得のためには努力の必要なことが教えられ、不可欠の悪として努力を考えてはならず、「恐怖の動機は努力に対する刺激とされるべきではない」[35]努力が行なわ

れるなら、学習の興味付けは教師が、当面の場合においては母親が、努めるべきことの第一なのである。

ペスタロッチはまた『育児日記』の中でルソーの「自由」についてふれ、教育にとっては同様に「従順」も重要であると説いている。

「真理は一面的ではない、自由は善であるが、従順も同様に善である。われわれはルソーが分離したものを結合しなければならない」(36)

「彼に自由と平和と沈着とを与えうるすべての機会を尊重せよ。事物の内的自然性の結果によって教えうるすべてのことを、決して言葉で教えてはならない。彼をして、見させ、聞かせ、発見させ、倒れさせ、起きあがらせ、失敗させよ。行動や行為が可能な場合には言葉はいらない。彼は自分でなしうることは自分でなさなくてはならない。君は人間よりも自然が一層よく彼を教育することを発見するだろう。だが彼を従順にまで慣らす必要を君が洞察する場合には、君はあらゆる注意を払って、自由の教育においては困難なこの義務にまで彼を育てあげるよう準備しなくてはならない」(37)

彼が「自由」の対極としての「従順」を提示する根拠としては、「従順」なしにはいかなる教育も不可能なこと、束縛なき自由は子どもの死をさえ招く危険のあること、社会生活に必要な習慣は抑制されずには養成されないこと等をあげている。「義務と従順とは不可離的に結合して歓喜にまで導かれなくてはならない。実際人間は盲目的に服従すべきではない」(38)だから「従順」にまで子どもを到達させるのは、至難である。しかし、合自然的順序で遊戯や知恵の材料と、またあらゆる事情と協力させることで可能とすることもできるのである。「従順」を導くにあたって処罰を用いることは断じて許されない。

「無知を過失として罰するほど子どもをひどく立腹させるものはない。無邪気を罰するものは心の迷えるものである」(39)

四　ペスタロッチの教育原理と幼児教育

ペスタロッチの幼児教育の底流にある基本原理は一体何であり、またその今日における有効性はどのくらい認められるのであろうか。

1　基本的原理

第一は、彼が幼児をいかにとらえていたかである。人間観の根本ともいうべきこの問題をペスタロッチは次のように規定している。「人間性のすべての能力を賦与されているものであるが、しかしその能力はいずれも発達しておらないので、いわばまだ開いていない芽のようなもの」(40)である。彼は『幼児教育の書簡』の中で人間の悟性は全くの白紙であるというロックの

「白紙説」を否定し、むしろあらゆる能力がその芽の形で与えられているとしている。ロックのいわゆる「白紙説」と全く対置的にペスタロッチの児童観を置きうるものかどうか簡単に即断できないが、人間に対する期待のかけ方においてペスタロッチの方がより楽観的であり、また幼児を未完成の「発達可能体」として認識している点において、ペスタロッチの的確な観察眼をより多くうかがうことはできよう。

次に、このような幼児の行きつくべき先として、つまり教育の目標として何を設定していたのか。

(一) 個人を導いて神に対する関係の認識に至らせること。

(二) 社会に対する関係において有用な一員としての資格を与えること。

(三) 個人としての幸福を与えること。

以上三つがその目標であった。第一の点は、神によって創造された被造物としての人間を、神によって植えつけられたあらゆる能力の自由にして欠けるところのない使用に適合させ、これらのあらゆる能力を人間の全存在の完成に向けるべきことを意味する。第二の点に関してペスタロッチが「真に有用であるためには真に独立自主であるべきことを必要とする」といっているのは注目に価する。[41] 独立自主はさらに自由の原理と密接不可分なものであり、ペスタロッチにとって根本的な問題であったと思われる。自由の原理が人類を支配すべきであるとしても、人間が人間として完成をみないでは真の自由はありえない、とする次のような表現をみることができる。

「人間が決断力を奪われている時、その精神が知識を貯えていない時、またその判断がおろそかにされている時、またなかんずく人間が道徳的な存在としてその権利と義務とについて無意識のままで放任されている時、自由について語ることは無益である」[42]

ペスタロッチがさらに「教育の究極目的は学校における学芸の完成にはなくて生活に対する適応にある」[43]という時、抽象的、観念的な注入主義教育を完全に否定し、生活近接の原理による生活教育、労作教育を意図していたのである。

教育を《子どもから》発想し、子ども自身のもつ内発的な諸能力の萌芽を教師はただ促進する役を担うにすぎないという「自己活動の原理」は近代教育のいわば核心といってよいであろうが、ペスタロッチにおけるこの原理の展開はあらゆる著作の中に息づいている。思考の合理性に基づくことなく、厳格な体罰を課され、恐怖的な権威のもとに注入主義教育の奴隷であった当時の子どもを解放した基本原理は「自己活動の原理」である。「この世紀の博識でもって急ぎすぎてはならない」[44]ということばは今日の能力主義教育の徹底化早期化の傾向の中で再

考しなければならないものである。

「子どもに対して多くを語ることではなくて、むしろ子どもとともに語りあうことである」。(45)

「移りやすい幼児の気分が冗長な説明に耳を傾けるように仕向けられるものであると期待するのは笑止であろう」といい、感情に左右されがちな幼児の気分に適合した方法によるべきことを、《子どもから》発想するペスタロッチが主張するのも当然である。それは言葉ではなく、事物によって行なわれるべきであり、直観が教授の基本とならなければならないという主張につながる。また、自然のもつ教育的感化力を大きく認め、あらゆる方法の合自然性を追求したことも今日一般に評価される点であろう。

幼児の感情の強烈さに配慮すべきことを説き、幼児期の最大眼目は心情の問題であることを特に主張したペスタロッチは幼児を「喜悦」によって支配すべきこと、決して権威によらないことを主張した。今日、幼児における遊びの重要性がよく指摘されるが、ペスタロッチにもその基本的精神はうかがうことができる。創造のよろこび、豊かな感情、身体の強健は普遍的に幼児教育の重大目標である。このような幼児教育の目標を追求しながら、自分で判断し、自分で行動できる人間をつくること、自立的独立的精神とその能力の形成を実現することをめぐって彼の幼児教育観は形成されていった。

彼の教育は早教育の推進であるがしかし、あくまで頭と手と心の調和であり、さらに心の優位における調和的発展である。今日みられる能力の早期開発は一面的で偏ぱな人間をつくる危険な考え方として対比的に考えることができよう。

2　家庭教育

その当否は別にして、ペスタロッチの教育原理は、「居間の教育学」、「親心子心」などと称されてきた。ペスタロッチほど家庭に重きをおく教育思想家もまれなのかもしれない。幼児の心意の発展を旨とし、その手段として母性愛に基づく母親の活動を主張した彼は、学校教育よりも家庭教育を理想とさえしている。『ゲルトルートはいかにその子を教えるか』において彼が「小学校の必要を漸次なくし、これを改良された家庭教育で補充すること」(46)と述べているのもそれである。家庭を重視し、母親の教育感化力を重視し、さらに進んでは家庭を範とし、理想とする教育は、今日における親子間の意識のギャップ、核家族化による家庭の崩壊、そこにしのびこむ国家による道徳教育支配等、本来家庭で行なわれるべき道徳、心の問題がおろそかにされている実情を再考させる機縁にもなるであろう。

母子の関係をかなめとする家庭教育のパターンは、つづいて生起する幼稚園、保育園の誕生にも重大な契機となってきてい

ることは歴史的に大きな意味をもつといえよう。「働く母親および貧困な家庭のため、幼児保育所設置の必要をも説いていること」[47]はその証左といえるかもしれない。

＊　＊　＊

ペスタロッチの教育思想の中に示された数多くの原理は近代教育の確立に大きな寄与を果たし、現代にまで影響を及ぼしている。十八世紀という時代的制約を考えれば、彼の教育原理が今日そのまま妥当なわけはない。幼児についての発達認識、訓練方法等に今日からみれば非科学的な点も存在するし、大体において彼の原理が、未分化、包括的であるという難点もある。それらは十九世紀から二十世紀にかけての心理学の急速な進歩によって是正されてきている。それにもかかわらずペスタロッチが今日教育史の上に巨人でありつづけるのは、人間に対する、子どもに対する、さらに幼児に対する根本的認識の正しさによるのであり、うむことなく実践されたその教育的努力の情熱と、権威に屈することなく民衆の解放に燃焼しつくした生涯の力強さが人々を引きつけるのだと思われる。教育に未来を託し、教育によって未来をひらこうとした基本的姿勢は、ややもすれば教育万能の教育立国論へと至る傾きも持ちながらも、今日のわれわれになおも訴えるところは大きいのである。

（広島大学大学院）

〔生涯〕一七四六年、スイスのチューリッヒに生まれる。法律、農業の研究を経て教育を志す。実践と著作、失敗と再起を繰り返す。世間の無理解の中で教育の改革による民衆の解放をますます堅固に志向する。後半生においてはとくに教育方法上の改革に努力を結実させていった。一八二七年死没後も、近代教育の成立に与えた影響は測りしれない。

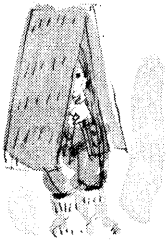
〔著作〕数多くの作品があり枚挙にいとまがない。特に幼児教育だけに限定すれば『育児日記』（一七七四年）、『グリーヴスにあてた幼児教育の書簡』（一八一八年）であろう。しかし幼児教育については、彼のほとんどの著作で少なくとも片鱗はうかがうことができる。教育方法については『ゲルトルートはいかにその子を教うるか』（一八〇一年）、『メトーデ』（一八〇〇年）など。この二著など、幼児にまでその方法の適用を考えていたと基本的にはいえよう。これらの著作はみな母親への手引きという点で一致している。また教育小説『リーンハルトとゲルトルート』（一七八一年―一七八七年）はペスタロッチの教育精神　方法を小説の形で民衆に与えようとした本であり、代表的作品といわれている。その他に、教育の基調を格言風に述べた『隠者の夕暮』（一七八〇年）、家庭や学校だけで解決できない問題を広く社会の体制の中で具体的に論じたものとして『スイス週報』（一七八二年）、『立法と嬰児殺し』

（一七八〇年）、政治哲学的分析の『探究』（一七九七年）、生涯の総結算の書『白鳥の歌』（一八二五年）等がある。

注

(1)朝日新聞（昭和四十六年十月六日）
(2)長田新『ペスタロッチ』岩波書店八一ページ
(3)ペスタロッチ『幼児教育の書簡』（平凡社版ペスタロッチ全集第十三巻）一四七ページ
(4)長田新『ペスタロッチー教育学』岩波書店二〇四ページ
(5)『幼児教育の書簡』二二四ページ
(6)同、一五三　(7)同、二一七　(8)同、二一八　(9)同、二一八　(10)同、二一八　(11)同、二一九　(12)同、二六五　(13)同、二六八　(14)同、二一九ページ
(15)ペスタロッチ『ゲルトルートはいかにその子を教うるか』（平凡社出版全集第八巻）二一三ページ
(16)『幼児教育の書簡』一九九ページ
(17)『ゲルトルート』二九ページ
(18)『幼児教育の書簡』一六六ページ
(19)同、二二一　(20)同、二二六　(21)同、二二七　(22)同、二二八　(23)同、二三一　(24)同、二三〇　(25)同、二三一　(26)同、二三一　(27)同、二三二　(28)同、二三三　(29)同、二三五　(30)同、二三六　(31)同、二三七　(32)同、二三七　(33)同、二三八　(34)同、二六三　(35)同、二六二　(36)同、二三五ページ
(37)『育児日記』　二三五ページ
(38)同、二三八　(39)同、二三八ページ
(40)『幼児教育の書簡』　一五二ページ
(41)同、二七一　(42)同、二二五　(43)同、二二二ページ
(44)『育児日記』　二三七ページ
(45)『幼児教育の書簡』二六〇ページ
(46)『ゲルトルート』四四ページ
(47)小川正通『幼児教育原理』八八ページ

私の保育



山崎美知子

四季の移り変わりもわからない都会の生活から、今年の四月信州の郷里にもどり、自然の中での生活が始まりました。そして、市の北部、山の麓にある保育園で毎日子どもととびまわったり、砂遊び、虫集めと楽しく過ごしています。

こんな生活の中で、一学期も終わりのころ、今まで感じた事のない何かを、かすかに感じ始めたのです。

砂遊びを見ても、子どもたちは与えられた砂場というわくの中の遊びではなく、生活の場にある土に親しみ、土のにおいの中で夢中で遊んでいます。

虫集めに興じ、草の根を分けてさがしまわり、コオロギやカマキリが草の中をとぶようになるとあき箱に穴をあけ、虫をさがして遊ぶのです。秋空にトンボがとび、子どもたちの生活は〝虫と遊ぶ〟という表現がぴったりです。

近くの社(やしろ)に行き、子どもの身の丈もある草むらで寝ころび、草のにおいをかぎながら、かくれんぼをしたりすもうをして遊ぶこともしばしばです。

大きな木を見上げ、「あれーめ」「あれはくち」などと怪獣や、おばけを想像し戦う子、こわごわ近づく子、その楽しいことといったらありません。

そしてまわりの木々が風に揺れるようすは、本当に何か話しかけているように見えるのです。

十月の初め、四歳と五歳児で近くのどんぐり山にどんぐり拾いに行きました。途中、りんご園に寄って、おやつに大きなりんごをいただき、小さなカバンは満員になりました。細い道を一列になって歩いたり、石ころの坂道を一生懸命登りました。時々「せんせいまだ」「ぼくちょっとつかれちゃった」などという声も出ましたが、下り坂になると足どりも軽くとびながら降りてきました。

山の中の、小さな木の橋を渡った所がどんぐり山のふもとです。足もとの落葉の中にたくさんどんぐりがころがっています。

さっそくどんぐり拾いを始めました。食事もそこそこに山登りです。

一歩山に入ると道らしい道もなく、雨水の流れたあとをたどるような所です。落葉の上はすべりやすく、子どもたちは「キャッ　キャッ」と喜び、木の枝や根につかまったり、「せんせいたすけて」とうれしそうに救いの手を求めたり、その緊張感は、声や手を握った時の強さで、私の体にも伝わってくるのです。

交通事故をはじめとする、さまざまな危険から身を守らねばならぬ都会の子どもには、知ることのできない、自然の中での人間らしい緊張感ではないでしょうか。

山の上まで登った子どもは、もうすっかり自分がどんぐりや、まつぼっくりになったかのように、山をころがったり、すべったりしながら降りて来るのです。

この姿を見、子どもと一緒にこの緊張感を味わい、私の感じていた何かとは、〝本物の人間の生活がここにある〟ということではないか……、と思ったのです。

今まで無我夢中で保育に取組んできましたがいつもいき詰まってしまい、何かすっきりしない状態に陥っていました。ここで本物の生活に触れ、目の前にあった大きな壁に小さな抜け道ができたような思いです。

この先何があるかわかりませんが、この生活の中で、子どもたちの心と体がおおらかに、たくましく育つことを信じたいと思うのです。

〈上田市芙蓉保育園〉

幼児の観察研究——反省と出発

津守　真

幼児教育の本格的研究はこれからだと私は思っている。それは、なにも、今までにすぐれた研究がなかったというわけではない。ただ、幼児の実際にふれる人が、そこに何か本当に大切なものがあると感じていたものを、思考の対象からはずしてきたのではないかと思うのである。科学的研究法のわくの中に入らないからという理由で、見のがしてきた。そこに重要なことがふくまれていたのではないかと思う。幼児の保育は、人間の歴史と同じだけ長い過去の蓄積をもった仕事である。幼児の存在そのものが、多くの不可解なものを内にふくんだ人間の生涯に関するものである。現代の幼児教育とても、その人間の全体像の理解の中で考えられねばならないと思う。

＊　＊　＊　＊

幼児の行動をどのように見るかということがここでの直接の主題である。私どもは、子どもが何かするのを目で見ることができ、話すのを耳で聞くことができる。子どもは庭を走り、おとなに何かを見せ、砂場で皿を洗い、だんごをのせ、木の下で子ども同志で会話をかわし、床の上でつみきで車をつくり、紙をはさみで切り、遊んだものをそのままにして走り去る。通りすがりの管理者は、片付けないでだらしがないと思い、教師は、こんなに遊んでばかりいていいのかと不安に思う。心理学者は、冷静に客観的に観察し、分析し、分類することを考える。私は、いま直ちに、どういう見方がいいか悪いかをいうつもりはない。ただ、

子ども自身はそこで一体何を考えいるのかという問いは、子どものことに本気にたずさわる者にとって、欠くことのできないものであると思う。それは、子ども自身の意識の中で、何を意図しているのかという問いだけではない。子どもが気付いている以上のことがそこにはふくまれている。子どもの行動の現象を通して、その奥にあるものをとらえ、それは何であるかを考えることが必要なのである。私共の生きているこの時代の主潮からいうと、目に見えてあらわれていることだけに、目を奪われやすい時代である。子どもの行動観察においても、外側から見たものを羅列しただけでは、子どもの世界で何が起こっているのかわからない。それでは、どうしたら行動観察を通して、子どもの世界をとらえることができるであろうか。

客観的観察について

客観性ということは、科学的研究の必要条件と考えられている。行動観察においても、客観的観察がすべてであるように従来考えられてきた。しかし、子どもの行動観察における客観性とは何であろうか。そのことをもう一度考え直さなければならない時期に来ていると思う。

客観的観察においては、観察者の知覚に与えられたものがまず重要性をもつ。とくに視覚と聴覚に、見えまた聞こえたままにできごとをとらえることは、人間である私どもに、常に伴うことである。観察においても、見聞きしたことを無視することができないのは、当然である。

ところで、われわれが外界を知る感覚器官は、視覚と聴覚だけではない。それ以外の感覚器官がある。赤ん坊を抱いたときなど、乳のにおいを通して私どもは安らぎを感じる。また、他人の家を訪問したときなど、その家の中のにおいをいつまでも覚えていることがある。嗅覚を通しても、われわれは外の世界の性質を知るのであり、それは案外、重要なことが伝えられていることもある。ただ、それを言語で説明しようと思うと、多くの文章を用いてもなお足らず、重要な部分は依然として残されてしまう。

触覚と運動感覚も行動観察にあたって、微妙なはたらきをする。そのことが明らかにわかるのは、観察室の中からガラス窓ごしに見る場合と、子どもと同じ部屋の中にいる場合とを比べるときである。観察室の中は、視覚と聴覚だけがはたらく場合である。子どもと同じ部屋の中にいるときには、いわば、子どもの息吹きが身近に伝わり、子ども

の活力やふん囲気が押しよせてくるのに、観察室の中ではそれが欠ける。また、才三者として子どもを観察する立場に立つときと、保育者として共に動く場合とでは、類似の微妙な相異である。この場合は、知覚の性質のみでなく、他のいろいろの要因が加わるが、知覚だけに限ってみても、相異がある。すなわち、保育者として、子どもと共に走るとき、運動感覚で子どもと同様の体験をする。そこでは、見ているだけの場合とは異なったものが伝わってくる。また、子どもが泣いているとき、見て知るだけでなく、そばにいき身を寄せるとき、身体の接触を通して子どもの中の何ものかが伝わる。

このような嗅覚、触覚、身体運動感覚をとり上げるとき、すでに客観的行動観察から一歩はずれているではないかという疑問が出てくる。たしかに、それは本人だけに特有の感覚であって、全く同じ感覚を他人がもつことはできない。しかし、そういえば、視覚でも同様の面がある。見る人の位置を考えただけでも、二人の人が全く同じものを見ているということはないのである。聴覚の方が、より多く人々に共通のものがあるといえるかもしれない。太鼓のリズムは、そこにいるすべての人に、踊り出させるような力をもっている。

こう考えると、触覚や身体運動感覚は主観的であり、視覚や聴覚は客観的であるというような分類はできないようである。どちらも、観察するその人が知覚しているのであるにほかならない。どの感覚器官であろうと、そこに与えられたものをそのままにうけとっていくならば、それは相手を知っていくことである。保育者は自ら身体を動かし、子どもと接触し、また見聞きして、多くの素材を結び合わせ、子どもの全体の姿をとらえる、

それでは、行動観察において、主観と客観とを区別するものは何であるか。才一に、それは、使用する感覚器官の違いではない。むしろ、用いる感覚器官の種類数が問題になる、一つのことを知るのに、一つの感覚器官だけで知るよりも、二つの種類の感覚器官を用いる方がより多く知ることができる。二つよりもさらに多くの感覚器官による方がなおよい。とすると、保育者として子どもとふれる方が、子どもの全体の姿に近づくことがよくできることは自明である。才三者として見るだけ、聞くだけの資料は、子どものある側面しか知れないことになる。

才二には、観察者の既存の知識との関係である。どの感

覚器官による資料であろうと、観察者の既存の知識のわくにはめてみようとすると、その資料は限定された一面的なものになってしまう。ごく身近な例でいうならば、おとなに理解しにくい行動があった場合、それを家庭のせいにしたり、問題児だとして既存の知識にはめるとき、たちまち、子どもの姿からはなれてしまう。このように、観察者側の見方を固定して、それにあてはめてみることを主観的というのである。

漢字の語源からみても「主とはしょく台の上で炎がじっと直立していることを示す字」であり、「いつも定位置を動かないのが主人である」（藤堂明保　漢字語源辞典）また、「客」は、「足先が固い石に届いて、ひっかかるさま」をあらわす。この意味からみると、自分の見方が固定して動かないのが主観であり、外にあるものにひっかかってとどまって、物の輪郭をあちこちうつりゆくのが客観である。多くの感覚器官を用いるほど、対象の輪郭はより明瞭になるであろう。視覚や聴覚のみでなく、触覚や身体運動感覚が加わる方が一層客観的材料が増すことになる。しかも、人間の感覚器官は限られたものであるから、知覚だけで得られることで、相手の全体をつくすことはできない。また、その知覚の材料を、自分の知識の体系にはめてみようとするとたんに、それは主観的となる。いまここでも、どちらがいいとか悪いとかいおうとしているのではない。あるときには、知識の体系にはめてみることがその側面をよりよく見るのに役立つし、あるときには、説明のつかない事実にぶつかって、考え方をかえなければならない。一つの知覚体験は、その両面をもっている。

要するに、ここで重要なことは、保育者が体を動かし、いろいろの場面で子どもにふれて知っていくことは、子どもの発達や教育のことを考える材料になっていくということである。それが社会常識であろうと、学問的立場であろうと、教育指導者であろうと、自分の考えをきめて固定させて、そこからだけ子どもを見るならば、それは一面的となり、子どもの全体像を見失う。自分が子どもを見、子どもの語ることを聞き、子どもにふれ、そして子どもとともに動いて、そこでできるだけありのままにとらえたことを総動員して考え合わせることが、子どもを知っていくのに必要である。

ここですでに明らかなように、従来幼児研究で多く用いられてきた客観的観察には、いろいろの点で限界がある。

才一には、使用する感覚器官をほとんど視覚と聴覚に限ったことである。それでは子どもの全体の把握には不十分であり、一面的になる。才二には、観察された行動を分析して、あらかじめ定めたカテゴリーに分類して、そこで得られた資料の相互関係、できうれば因果関係を求めようとしたことである。それが社会的行動であろうと、知的行動であろうと同様である。まず観察したものをあてはめるカテゴリーを定義し、そこにはめてゆこうとする。研究者の知覚に映じた資料が、子どもの非常に重要な部分を残さずにふくんでいるかのようである。それも、子どもの真実な姿にせまろうとする努力の過程としてならば、十分に容認される。こうしてなされた尊敬すべき児童研究は、数多くある。しかし、研究者に知覚された子どもの行動が、子どもの実体のすべてであると考えるようになると、それは間違ってくる。まして、それが教育を支配するようになると、人間の心を破壊するものとなる。子どもには、子どもの考え方があり、感じ方がある。どこまでいっても他人にはわかりきれない神秘なものがある。教育も研究も、その前提をくずしてしまったら、人間同志のものではなくなる。

さて、幼稚園における子どもの行動観察に話をもどそう。子どものすること、いうことを、全感覚器官を動員して観察し、（それは具体的には保育者としての観察と、才三者の観察とを総合したものになる）できるだけ詳細に記録にとどめたとしよう。実例をあげるならば、いくらでも引用することができるが、煩雑であるから、ここでは省略する。詳細な行動観察記録の適切なサンプルが集められれば、その子どもの全体像が把握されるであろうか。それがどんなに詳細正確をきわめても、知覚によって得られた材料だけでは全体像の把握に十分ではないのである。それには、知覚によって媒介されながら、知覚をこえて「感じる」力をはたらかせることが必要になる。知覚による資料が、行動の表面から知るものであるとするなら、「感じる」のは、子どもの世界のかくされた部分を知ることである。子どもの行動は、あらわれたものがすべてではなく、あらわれていない世界の表現である。

行動を表現としてみる

観察された行動は、観察者の側から知覚されたものであ

って、子どもの側に起こっていることのすべてではない。われわれが観察するものは、子どもの側に起こっている何ものかの外にあらわれたものである。そのある部分は子どもによって気付かれた部分であり、そのある部分は、子どもにも気付かれない部分である。そのことは、自分自身について考えてみるならば、一層明瞭になる。外にあらわれている自分自身の行動は、自分のすべてではない。外にあらわれている面だけで自分のすべてが理解されるとはだれも思わないであろう。また、自分が意識し、意図したことだけが外にあらわれるのではない。自分自身を形作っている何ものかが外にあらわれ出ているに違いない。

「ねー、せんせい、ここまでとどく?」といって、ジャングルジムに上って、先生をよぶ子どもがいる。行動として見るときには、先生の注意をひく依存行動の一つとしてみることもできる。しかし、それは観察者の側にカテゴリーを設けて、あてはめて見ようとした見方である。先生は下から見上げて声をかける。「こっちから見るとすごいわよ。お空にいるみたい」先生の見方は、子どもの側の世界にふれている。ふだん、おとなを見上げて生活している子どもが、このときは、おとなを上から見おろしている。そして、空に上ったような得意さを感じて、「ねー、せんせい、ここまでとどく?」と叫ぶ。そして「お空にいるみたい」と先生にいわれて、得意になり、満足している。その子どもの感じ方は、そばで観察している観察者にも「感じ」として伝わってくる。まして、先生には、その感じはとうに伝わっている。それが先生に、「こっちから見るとすごいわよ。お空にいるみたい」といわせる。

ここで明らかなように、観察者の観察も、先生の観察も、すでに知覚をこえている。そこでは、子どもの側の世界が「感じ」とられている。その感じとられている部分が欠けたら、行動面だけどんなに詳細に記録されたとしても、中心を失った断片の寄せ集めになってしまう。

知覚されたものを表現としてみるとき、観察者の世界とは異質の「他」の世界が開けている。この「他」の世界は、こちら側からは、根本的にはわかりきることのできない世界である。行動としてこちら側から見えるものは、その「他」の世界の周縁にすぎない。それでは、この「他」の世界の奥にあるものは、全く知られ得ないものであるのか。それはここに述べた「感じる」はたらきによって、ある程度、可能になる。

「感じる」ことは、知覚を契機とすることが多い。見のがされやすいようなこまかい表情やしぐさなどがきっかけとなっていることも多いのだろうと思う。しかし、知覚にとらわれては、この力を失ってしまう。むしろ知覚を契機としながら、知覚から自由になって、相手の世界の心の波動にあわせて、こちらの感じ方をかえていくことのできる力である。

そこで「感じる」力をはたらかせるのには二つの前提がある。才一は、自分には気付かれていない「他」の世界があることを、自分の中に認めることである。それは自分の意志とは無関係に動く世界である。自分の感じ方とは全く異なっているかもしれない世界である。自分の世界の中にこういう空洞が位置を占めることである。ことに、子どもとふれているときに、自分とは異質の「他」の世界を認め、それに位置を与えていくことである。

才二には、自分が自由に感じることのできるような、解放された心の状態を保つことである。それには、既存の知識から解放されることも必要である。またいそがしい緊張状態からの解放が必要なこともある。「感じる」ということは、「イメージ」といい直してもよい。しかし、イメージというと、かえって固定した空想を連想しやすい。また、たんに、思い浮かべられた知覚、すなわち表象をいう場合もある。そこで、むしろ日本語では「感じる」といった方が動的で適切だと思う。そのような心の状態をもつのには、いくらか訓練をも要する。詳細で正確な行動観察記録をとるのには訓練を要するとするならば、子どもの行動にふれて、「感じる」ことができるようになるのには、それ以上の訓練が必要とされても不思議はないであろう。すぐれた保育者といわれる人をみると、みな、このような、子どもの世界を「感じる」力を持ち得た人であるように思う。

「感じる」力が敏感になると、同じ行動に接しても、それだけ、子どもの世界に深く中心にふれて感じとることができるようになる。また、保育の最中は、次々と新しい場面の要求に追われ、緊張も大きく、十分に感じる力をはたらかせる余裕のない場合も多い。そこで、そのときほのかに感じとったことを手がかりにして、後になってから考え直すときに、保育の最中にはとらえきれなかったことがとらえられることも多い。

さて、知覚面で気付かれた世界を自分の中の「一」の世

界とすると、自分の中には、知覚され得ず、気付かれない「他」の世界がある。前者の世界は、自分にとって知られている部分であり、言語で説明もでき、また体系ももち得る。それに対して「他」の世界は、未知であり、言語化されにくい。人はこの二つの世界を同時に保ちつつ生きている。そして、あるとき、ある人は一方に傾き、他の人は他方に傾く。技術社会、能力主義の現代では、人は気付かれない「他」の世界を無視しようとする。「他」ですらも、すべて、自分の既知の世界の中にとりこむことができると考える。そして、すべてを、自分の知識の中だけで割り切ろうとする。そこで一面的な見方になる。

子どもには、常に未知の「他」の世界が大きな位置を占めている。子どもは、それに脅かされ、見知らぬものへの夢をいだき、目に見えない世界の存在を信じて疑わない。風の揺らす窓の音に、風とともに乗ってくる何ものかを感じ、シャボンの泡立つ中に、わき立つ生命のうごめきを感じる。子どもの生活をいくらかでも理解しようとするならば、子どものもつ夢のような世界を、いくらかでも感じ、体験する努力をせねばならないと思う。子どもを能力だけで見るような一面的な見方では、到底、子どもの世界に近づくことはできない。

人間の原型としての子どもの行動

子どもは頭で考えて意識して行動するのではないから、子どもの行動には、意識しない「他」の世界がそのままにあらわれやすい。それは、その子どもだけのものではなく、人間に共通のものである場合がしばしばである。おとなにあっては、社会の常識や、言語の固定概念によってかくされてしまったものが、子どもの行動には、本来の姿を保ってあらわれる。子どもの行動観察というのは、人間の精神の原型を見いだす作業であるともいえる。そのような例は数多く、またそこにこそこれからの観察研究の課題があるのであるが、次にいくらかの例を述べておきたい。

子どもはしばしばおとなに何かを求め、おとなのそばを離れず、ついてまわる。おとなの体験の側からいうならば、理由がわからずに、うるさくつきまとわれるということがある。外にあらわれた行動としては依存行動であるが、子どもの世界の表現として見るならば異なった見方ができる。子どもは何かをしたいと思い、いろいろと試みるがうまく

いかない。これかと思って始めてみても、それでは満足できず、他のことを探し求める。おとなの側からいうならば、無理をいっておとなを困らせるということになる。ところが、そのような状態をいくらかの時間もちこたえていると、子どもはいろいろの可能性をためした後、一瞬の機会に、自分のしたいと思っていたことにいきあたる。そうすると、もはや、おとなを必要とせず、子どもは自分の仕事に没頭する。

最初の、おとなにつきまとうところだけを見ていると、依存行動と分類したくなることが、その後まで継続して見ると、ひとつの行動の意味が明瞭になってあらわれるのである。そこまで知ってから、前の行動にさかのぼってみると、行動を外面から見たのでは、不十分であったことが知られる。一つの行動は、そのときの子どもの世界の表現なのである。さらにまた、そのときの子どもの表現であるにとどまらない。どうしてよいかわからず、混沌とした中で、人は探し求めており、その中にあるとき中心が見出されるという、多くの人の精神に共通に存在する原型でもある。

混沌の中から中心が見いだされる原型は、子どもの描くうずまきの描画にもあらわれる。いり乱れる曲線を描いていた三、四歳の幼児が、あるとき、中心に向かううずまきを描くときは、子ども自身のイメージの世界で、中心を見いだしたときである。これを描いている子どもには、そのころの子どもの生活全体の中にある感じ方、すなわちイメージがあらわれる。うずまきを描く子どもにふれるとき、混沌の中に中心を見いだす原型にふれているのである。

同じ原型は、子どもの遊びの中にも様式化されてあらわれているものが数多くある。「かごめかごめ」で、子どもたちが輪を作ってぐるぐるまわり、中心に鬼がいるような遊び、子どもたちが列を作って、うずまき型に動いていく行列、おとなに片手を持ってもらって、ぐるぐる回転するめまいの遊びなど。お祭りのとき、中央で太鼓をたたき、そのまわりに、幾重にも人の輪を作って、踊りながら動いていくなど。中心を求めるうずまきのイメージが、その中でつくられていく。

もう一つ、私が興味深く観察した事例をのべる。

あるとき、私は、幼稚園で、七、八人の子どもたちがシンデレラごっこをしているところにいきあたった。シンデ

レラのレコードがかけられて、子どもたちだけで、レコードの進行につれて、シンデレラの物語の筋のように、動作をしていた。ピンクやみどりの布のスカートをはき、いい争いながらも役を自分たちできめて、その場面らしく感情をこめて、役のように振舞っていた。何度かくりかえしていたが、見ていても子どもたちと動きの自然な高まりが感じられて、楽しい場面であった。

その中でも、子どもたちの活動がひときわ活発になり、興奮に近い活気を感じさせられる場面が二つあった。その一つは、魔法使いのおばあさんが、杖でさわると、汚い洋服を着ていたシンデレラが、美しく着飾った王女様になるところである。そこでな、みんながはしゃいで踊って、ある男の子は、紙をひきちぎって空にまき、雪だ、と叫んでとびはねていた。シンデレラの話と雪は関係ないように思うが、雪が降ったはなやかなイメージ（雪は、子どもたちにまず、はなやかな感じを起こさせるようだ）が、王女様への変身の瞬間のイメージと共通のものがあったのであろう。人間の原型としての変身を考えるとき、これも興味深いテーマであるが、ここで注目したいのはもう一つの場面である。それは、時計が十二時を打って、シンデレラがいそいで家に帰ろうとするとき、靴が片方ぬげるところ、それから、それをみんなにはかせてみるところである。そこでは、子どもたちがわっと集まって靴をもぎとり、みんなでのぞきこんで、その靴をはかせてまわった。みんなの関心が一時に一点に集中して、非常に興味深い場面であった。

これを見て私は、「くつ」というのは、子どもにとって、何か特別な意味があるに違いないと思った。それほどまでに子どもたちをひきつけるのだから。

（つづく）

＊

＊

＊

お茶の水女子大学

幼児保育現職研究のおしらせ

幼児教育の現職者が保育の原理を研究するための定期研究会を開く予定ですので、希望の方は左の要領で申込んでください。

一、昭和四十八年四月より、週一回、定期的に開催する。
一、お茶の水女子大学の教官が担当する。
一、午後六時―八時とし、一年間継続する。
一、定員　四十五名
一、資格　幼児保育の現職経験のある者、短大卒またはそれに準ずる者、一年間継続可能な者。
一、規則書ご希望の方は左のようにお申込みください。

東京都文京区大塚二―一―一（〒112）
お茶の水女子大学家政学部児童学科内　幼児保育研究室　現職研究会宛

氏名、生年月日、住所、現職を記し、二十円切手を同封して封書で申し込むこと。

電話（943）三一五一、内線三三〇、三六六

申込期日　昭和四十八年二月末日まで

幼児の教育　第七十二巻第二号

二月号　定価一〇〇円

昭和四十八年一月二十五日印刷
昭和四十八年二月一日発行

112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津守　真

112東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所　凸版印刷株式会社

101東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

フレーベル館の新学期用品'73

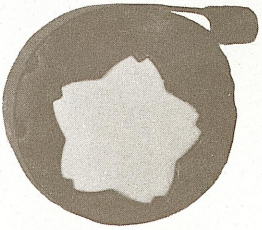
とても便利な“れんらくちょう”ができました!!

れんらくちょう…100円

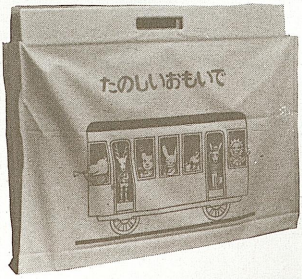
おたよりがあると、ひと目でわかる、小銭もおちない保育料袋入れなど、新しいアイデアがいっぱいの連絡帖です。

実用新案出願中

☆新しくなりました!!



組別名札・特……30円
（ビニール製）



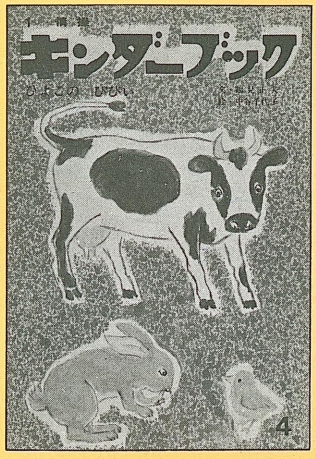
たのしいおもいで……240円
（ビニールレザー製）

新学期用品は、このほか数多くとり揃えております。お申し込みは弊社代理店、支社、支店、出張所へ。

お子さまの成長にあわせてお選びください

4月号・フレーベル館の5大月刊保育誌

情操をゆたかにし、創造力をのばす

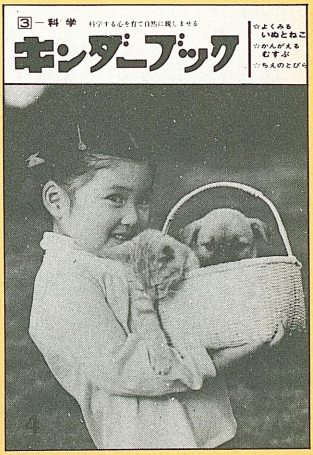


キンダーブック　1—情操
A 4 判・20頁・多色刷　つばめのおうち　こいのぼり　特別付録
団体購読価**100円**

観察の眼をそだて、心情をゆたかにする

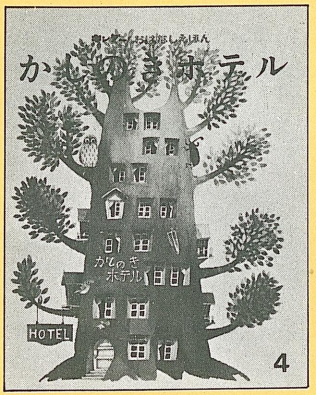
キンダーブック　2—観察
A 4 判・36頁・多色刷　つばめのおうち　こいのぼり　特別付録
団体購読価**130円**

科学する心をそだて、自然に親しませる

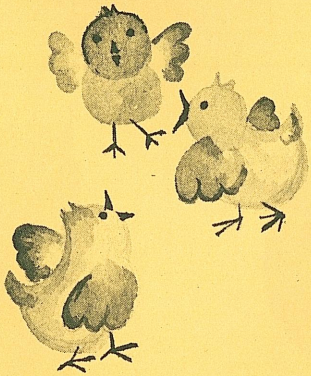


キンダーブック　3—科学
A 4 判・36頁・多色刷　つばめのおうち　こいのぼり　特別付録
団体購読価**130円**

幼児の心を育てる



キンダーおはなしえほん
L判・36頁・多色刷　こいのぼり
特別付録
団体購読価**130円**



園児をもつ母親の専門誌

ホームキンダー
L判・100頁・多色刷　特別付録
団体購読価**100円**